

国立国語研究所学術情報リポジトリ

基礎篇第十九課 てんきがいいから さんぽをしま
しょう：原因・理由の表現

| | |
|-------|--|
| メタデータ | 言語: Japanese 出版者: 公開日: 2020-03-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 国立国語研究所 メールアドレス: 所属: |
| URL | https://doi.org/10.15084/00002798 |

基礎篇第十九課

てんきがいいから
さんぽをしましょう

——原因・理由の表現——

国立国語研究所

前 書 き

国立国語研究所では、昭和49年度以来、日本語教育教材開発事業の一環として日本語教育映画基礎篇を作成してきた。これは従来、文化庁において進められていた映画教材作成の事業を新たな形で引き継いだものである。

日本語教育映画基礎篇は、各課5分の映画にそれぞれ完結した主題と内容を持たせ、それを教育の必要に応じて使用する補助教材、また、系列的に初級段階の学習事項を順次指導する教材として提供しようとするもので、全30課を予定している。

映画の作成にあたっては、原案の作成・検討から概要書の執筆まで、また、実際の制作指導においても、日本語教育映画等企画協議会委員の方々に御協力頂いた。ここに厚く御礼申し上げる。

この解説書は、映画教材の作成意図を明らかにし、これを使用して学習し、指導する上での留意点について述べたものである。この解説書がこの映画教材の利用を一層効果あるものにするを願っている。

この第十九課「てんきがいいからさんぼをしましょう」の解説は、日本語教育センター日本語教育指導普及部日本語教育教材開発室が企画・編集し、執筆にあたったものは、次のとおりである。

本文執筆 窪田富男（企画協議会委員・東京外国語大学教授）

資料1., 2. 日向茂男（日本語教育センター日本語教育指導普及部日本語教育教材開発室）

昭和58年3月

国立国語研究所長

野 元 菊 雄

目 次

| | |
|--------------------------------|----|
| 1. はじめに | 1 |
| 2. この映画の目的・内容・構成 | 2 |
| 2.1. 目的・内容 | 2 |
| 2.2. 構成——場面を中心として | 4 |
| 2.2.1. 言語場面，言語表現についての扱い | 4 |
| 2.2.2. 言語場面，言語表現についての解説 | 5 |
| 3. この映画の学習項目の整理 | 45 |
| 3.1. 「から」と「ので」 | 45 |
| 3.1.1. 「から」と「ので」が承ける形 | 45 |
| 3.1.2. 「～てから」と「～たから」の混同 | 48 |
| 3.1.3. 「から」を接続詞として使う誤用 | 48 |
| 3.1.4. 「ので」と<「のだ」の変化形>としての「ので」 | 49 |
| 3.1.5. 「から」と「ので」の違い | 50 |
| 3.2. 名詞化辞としての「の」 | 57 |
| 3.3. 「らしい」と「ようだ」 | 60 |
| 3.3.1. 接尾辞「らしい」 | 60 |
| 3.3.2. 「ようだ」が「比況」を表す場合 | 61 |
| 3.4. 非存在を表す「ない」 | 62 |
| 4. 練習問題 | 65 |
| 5. 参考文献 | 73 |
| 資料1. 使用語彙一覧 | 75 |
| 資料2. シナリオ全文 | 99 |

1. はじめに

この日本語教育映画基礎篇は、初歩の日本語学習期における視聴覚教材として企画・制作されたもので、この映画「てんきがいいからさんぼをしましょう」は、その第十九課にあたるものである。

この映画の企画、概要書（シナリオ執筆のための最終原案）の執筆等に当たったものは、次の通りである。

昭和55年度上期 日本語教育映画等企画協議会委員（肩書きは当時のもの）

石田 敏子 国際基督教大学専任助手
木村 宗男 早稲田大学語学教育研究所教授
窪田 富男 東京外国語大学教授
斎藤 修一 慶応義塾大学国際センター助教授

国立国語研究所日本語教育センター関係者（肩書きは当時のもの）

野元 菊雄 日本語教育センター長
武田 祈 日本語教育センター日本語教育教材開発室長
日向 茂男 // 日本語教育教材開発室研究員
清田 潤 // // 技官
川瀬 生郎 // 日本語教育研修室長

この映画「てんきがいいからさんぼをしましょう」は、日向茂男、清田潤の原案に協議委員会でも検討を加え、概要書にまとめあげてから制作したものである。制作は、日本シネセル株式会社が担当した。概要書のシナリオ化、つまり脚本の執筆には同社の前田直明氏があたり、また同氏はこの映画の演出も担当した。ただし演出の際の言語上の問題については、協議会委員及び日本語教育センター関係者の意見が加えられている。

本解説書は、日本語教育教材開発室の日向茂男が全体企画・編集を行い、執筆には窪田富男委員があたった。また資料1.、資料2.は、日向茂男が担当した。全体の企画、また執筆にあたっては、この映画の企画・制作段階での意図が十分生きるよう努めた。

現在、この映画は、より多くの人の利用の便をはかって下記の九か所において貸し出しを行っている。

- 北海道教育庁指導部社会教育課視聴覚教育係
- 宮城県教育庁社会教育課
- 都立日比谷図書館視聴覚係
- 愛知県教育センター企画管理係
- 京都府教育庁社会教育課
- 大阪府教育庁社会教育課
- 兵庫県教育庁社会教育・文化財課
- 広島県教育庁社会教育課
- 福岡県視聴覚ライブラリー

なお、この映画は、そのビデオ版とともに上記制作会社が販売している。

2. この映画の目的・内容・構成

2.1. 目的・内容

この映画「てんきがいいからさんぼをしましょう」の主要な目的は、原因・理由を表す「から」「ので」を提示し、その意味・用法の理解をはかることである。

われわれの日常言語において、原因・理由・根拠などの説明は、相当に必要度も頻度も高いもので、複雑な話の内容をできるだけ論理的かつ簡潔な形で表し、しかも生き生きとした自然な会話を進行させようとするれば、この「か

ら」「ので」などは不可欠なものと言える。この原因・理由・根拠などを表すことばは、「から」「ので」に限らず、「～て」「ために」「せいで」「以上(は)」その他が使われるが、「から」「ので」はその代表と考えられていて、日本語教育においても、初級段階の教科書でほぼ必ず提出されている。

この「から」「ので」は、狭義の表現意図の学習としては、原因・理由を述べたい場合の形式を習得することであるが、文法上は二つの文——前の文（従属節／文）と後の文（主節／文）——の結びつき方、つまりその制約を知ることである。すなわち、因果関係の表現を〈複文〉という文法形式で学ぶことである。いわゆる重文もふくめて、一文の中に述語が二回以上出てくるものを複文と呼ぶとすれば、学習者はすでに「～ですか、～ですか」「～て、～て、……」「～たり、～たり」のような並列を表す文型や、「これは～へ行くバスです」のような比較的簡単な連体修飾は学習している場合が多いだろう。しかし、〈複文〉のむずかしさは、従属節と主節とを結ぶときの構文上の制約にあるわけであるから、その制約のむずかしさは学習者はまだ本格的に体験していないと言っていいだろう。日本語の研究それ自体としても複文の研究はまだ未開拓な面が大きい。と言っても、「から」「ので」の研究は、その中で、もっとも研究が進んでいる項目と言っていいだろう。

この映画で取り上げられている「から」「ので」は、初級段階を考慮して、基本的な用法にとどめてあると言ってさしつかえないが、一文の中で「から」と「ので」が交替可能か否かというような問題になると、例文によってはかなりデリケートな問題をふくんでいる。しかし、初級段階の指導としては、白黒がかなりはっきり説明できる範囲にとどめておいたほうがよいことは言うまでもない。

この映画では、「から」「ので」と文末の形の組み合わせは次のものが取り上げられている。

- (1) から： ～から、～ましょう（よ）……………4回

| | | |
|-----------------|-------|----|
| ～から、～ませんか | …………… | 1回 |
| から、～ください | …………… | 3回 |
| ～からです | …………… | 2回 |
| (2) ので：～ので、～んです | …………… | 1回 |
| ～ので、～ます | …………… | 3回 |
| ～ので、～ました(ね) | …………… | 3回 |

「から」と「ので」の意味・用法の違いについては、3.1.を参照されたい。その他に指導上の小項目としては、

- (3) 名詞句(節)化の「の」
- (4) 接尾辞「～らしい」と助動詞「ようだ」
- (5) 存在・非存在の「ある」「ない」
- (6) 限定の助詞(副助詞)「だけ」
- (7) 複合動詞「～すぎる」
- (8) その他(「ちょっと」「せっかく」「まるで」などの副詞)

などをあげることができる。これらは指導上の必要に応じて、説明や練習の量や難易が加減されることが望ましい。(3)(4)(5)についてはやはり、3.2., 3.3., 3.4.を参照されたい。

2.2. 構成——場面を中心として

2.2.1. 言語場面、言語表現についての扱い

映画での場面や言語表現については、以下の通り扱うことにする。

1. 映画の構成にしたがって、場面を分ける時には、Ⅰ, Ⅱ, Ⅲ……のようにし、それを更に小場面に分ける時には、Ⅰ—1, Ⅰ—2, Ⅰ—3……のようにする。
2. 言語表現については、文単位で①②……のように通し番号をつける。文を変形引用する時には、'の印をつけ、①' ②'……のようにする。変形引用がふたつ以上ある時には、'''''の順で'を重ねていく。
3. なおこの映画中に直接現れていない文や語句を例示する時には、[1]

[2]……のように [] 付きの番号をつけ、その変形引用には、上記2.の場合同様'印をつける。文や語句を束にして例示する時も出現順に通し番号にする。

以下の言語表現の扱いについては、文単位の認定に多少問題のあるところもあるが、ここでは積極的にはその問題に触れない。なお①②……の文番号は、使用語彙一覧で引用される文やシナリオ全文でのものと共通である。

2.2.2. 言語場面、言語表現についての解説

この映画の主題は原因・理由の表現、つまり「因果関係」の表現であり、どのような場面で、どのような意図に基づいて表現がなされるかの若干の例を示したものである。

大きく分けて、次の四つの場面が取り入れられている。登場人物は三人、季節は四月初旬である。

場面Ⅰ お茶の水駅前で

順子が正子と待ち合わせをし、いっしょに大学へ行く（まず二人の人物紹介）。^{ひじりばし}聖橋を渡る。背後に小さくニコライ堂が見える。

場面Ⅱ 大学構内で

新学期が始まったばかりの構内に入り、図書館の方へ向かう。順子・正子の二人、もう一人の登場人物山田と会う。神田へ本を買いに行き、ついでに桜を見に行く話をする。

場面Ⅲ 神田の古本屋街で

山田の買いたい本をさがすが、なかなか見つからないので、いくつもの店に入出入りする。あきらめようとしたころ、やっと見つかる。

場面Ⅳ 桜並木で

満開の桜に感嘆しながら並木の下を散歩。堀の水、散る桜、ボート。疲れてベンチで休む。

それぞれの場面での発話（文）の数と「から」「ので」の出現回数は次のとおりである。

この4つの場面83文中には、「ええ」「やあ」「ね」「ねえ」「はい」だけで

| | 文 数 | か | ら | の | で |
|---------|-----|----|---|---|---|
| 場 面 I | 11 | 1 | | | 1 |
| 場 面 II | 27 | 5 | | | 3 |
| 場 面 III | 32 | 4 | | | 2 |
| 場 面 IV | 13 | 0 | | | 1 |
| 計 | 83 | 10 | | | 7 |

一文と数えるもの（つまり「ああ、どうも。」などは除いて）が14ふくまれているから、それを除くと69文中の17文、つまり約25パーセントの文に「から」または「ので」が使われていることになる。これは、通常の会話文が一般に短いことを考えると相当の頻度で提出されていると言っていいだろう。

以上4つの大きな場面は、それぞれ2つから5つの小場面に分割できるが、それはそれぞれの解説で扱うことにする。

なお、映画教材の扱い方はさまざまあり、別の一書をもって解説されるべきであるが、一つだけ希望を述べておく。初めから言語教育を目的として制作されたこの映画を学習者に見せる場合には、使用する映写機やビデオに一時停止装置がついていても、最初に少なくとも一回、全巻を通して見せてしまったほうがよい。その場合、指導者の判断によっては、音声を全く消して、画面だけを見せ、背景や人の動きを予め頭に入れさせておくのもよい。学習者は初めて見る映画の場合は、しばしば、言語表現に注目するよりも、その背景や風物などに気をとられがちだからである。一時停止を利用した教師の解説や練習は早くても2回目以降のほうがよい。特にこの映画のように因果関係を扱った表現は、結果のほうは比較的画面から分かりやすいとしても、原因・理由の部分は必ずしも眼で確かめられず、話し手の心のうちにある場合がよくあるからである。

I 駅前で (①～⑪)

テーマ・タイトルにつづく最初の画面は、雑踏する駅の出入口である。画面のほぼ中央上と右に2か所「お茶の水駅」と書かれた表示板が見える。国

電中央線のお茶の水駅である。お茶の水駅は千葉方面に向かう総武線の通過駅でもある。「きっぷうりば」「出口」「入口」などの表示も見える。人びとが多勢はげしく行き交っている。多少ふとめの女性が四角いコンクリートの柱にもたれながら、腕時計と改札口を見比べている。この女性が順子であるが、学生であるか否かはすぐには分からないだろう。そこへ、右手に本をかざしながら、人混みと柱の間をすりぬけるようにしてもう一人の女性が現れる。待ち合わせの相手正子である。

ここまではせりふはない。しきりに時刻を気にしているらしい様子がテーマである。駅の時計はどこにも見えない。

「お茶の水」という名称は、行政区画上の正式な地名ではない。東京都の神田と本郷の境、国電お茶の水駅付近の通称である。神田川に沿っていて、江戸時代にその北岸にあった高林寺の境内から茶の湯によい湧き水が出て、将軍にも献上されたことに由来する。駅は現在千代田区神田駿河台四丁目に属する。この国電お茶の水駅の北側には湯島聖堂や国立医科歯科大学があり、南側から南西一帯に数多くの学校（小・中・高・大）と古書店が密集しているの、学生街として名高い。

I-1 待ち合わせをして (①～⑦)

人混みと柱の間をすりぬけるようにして、突然正子が現れる。

正子「①ああ、ごめんなさい、遅くなってしまって。」

(順子、腕時計を見ながら)

順子「②もう二十分すぎよ。

③山田さんが待っているから、急ぎましょう。」

(二人、足早に歩き始める。)

正子「④あら、ほんとう？」

⑤山田さんが待っているんですか。」

順子「⑥ええ。

⑦この本を返さなくてはならないので、図書館の前で会うんです。」

ここまでくれば二人の服装、持ち物から、学生であることはほぼ察しがつくだろう。現在(1980)の女子学生の平均的服装と言っていいかもかもしれない。

①の「ああ」という感動詞は、この場合相手を確認したことを表す。同時に次の「ごめんなさい」といっしょになって遅刻を気にしていたことを表している。「ごめんなさい」はおわびのことば。親しい間柄では「ごめん」(御免=ゆるしを乞うの敬語)だけでも使われる。「ごめんなさい」は語形上でいねいなおわびのことばであっても、目上にはあまり使わない。ただし子供は使う。目上には「すみません(でした)/申しわけありません(でした)/失礼いたしました」などがふつう。なお、「ごめんなさい」は I'm sorry. などと違い相手の不幸を見舞う時には使われないことにも注意。また「ごめんなさい」(訪門のあいさつ)と混同しないこと。「ごめんなさい、遅くなってしまって」は「遅くなってしまって、ごめんなさい」の倒置ではあるが、理由の説明が後に来ているのは、いわばつけたしのようなものであり、話者の言いたいことをまず言いたかったからである。話者の中心的な気持——この場合は、おわび——が強ければ強いほど、その表現が文頭に来るのは話しことばでごく自然なことであり、書きことばの語順とはかなり違った傾向を見せるのが日本語である。次のような表現も同類である。

[1] ひさしぶりですね、あなたに会うのは。

[2] 帰りましょうよ、遅くなったから。

述部—主部、または、主文—従属文という語順は、話しことばでは決してめずらしくない。この、後にくる部分は前の文の内容の軽い補足説明であるから、場面・文脈に応じて表に現れないことも多い。日本語の書きことばと話しことばとの大きな違いの一面がここにあり、話す・書くいずれの指導においても、互いに他を見つめた指導が要求されるゆえんである。

「～しまって」の「て」(接続助詞)は「ごめんなさい」の補足説明をする際のつなぎの役目を果すもの。「て」自体に意味があるわけではない。「送ってくださって、ありがとう」も同じ。「～てしまう」は「完全に」(完了)の意味を持っているが、不都合や期待に反する場合、後悔の気持を

表す場合などにもよく使われ、ムード性の強いアスペクト形式である。これについては、「そうじはしてありますか」の解説を参照されたい。

②の「もう二十分過ぎよ」は、相手が待ち合わせ時刻に遅れたことに対して、いづらか難詰口調で言っており、この場合の「(名詞)よ」は女性特有の言い方。また、親しい間柄であることを示唆する。男性なら「～だよ」となる。この「二十分過ぎよ」は、現在の時刻そのものを行っているのであるが、学習者は「二十分遅れ」と誤解するおそれがある。しかし、待ち合わせ時刻は視聴者には明示されていないから「二十分過ぎ」という表現から約束の時刻が「〇〇時」ちょうどだったであろうと推測するのも無理ではない。そうだとすれば、遅れた時間も「二十分」ということになる。この「〇〇時」が何時であるかは、後の⑩に行き行って初めて推測がつく。「過ぎ」は「過ぎる」の名詞形(連用形)で時刻を表す場合の接尾語的用法。

③の「山田さんが待っているから、急ぎましょう」はこの映画で最初の「から」の提示。前の文(従属文)では文法上「わたし(たち)を」が、後の文(主文)では「わたしたちは」が略されていると見ていいだろう。しかし、分かり切っている(と考えられる)ことは、言わないのが原則。ここでは、主文に「～ましょう」という勧誘を表す形式が来るときは、「から」を用い、「ので」は用いないというルールを与えてさしつかえない。(「ので」は⑦で初めて出る。)また、「から」が承ける形は「～ます/ですから」と「ていねい体」が多いが、ここでは「ふつう体」になっている。これらについては、3.1.1.の解説を参照。ここで練習するとすれば、せりふをモデルとして、「～が～ているから、～ましょう」とい文型を設定し、従属文の主語と主文の主語とが異なる場合の練習をするのもよい。たとえば、

- ③' 1) 雨が降ってっているから、もう少しここにいましょう。
2) 友人が勉強しているから、静かにしましょう。
3) 寒いから、窓をしめましょう。
4) ここはむずかしいから、よく聞きましょう。

教室内の練習では、実際に行動を起こすこともしにくいので、口頭作文に

なっても止むをえない。

③の「山田さん」がどんな人物であるかは、まだ不明。

④の「あら」はおどろきを表す感動詞。主として女性が使う。このおどろきのことばから、正子は順子と待ち合わせの約束はしたが「山田さん」に会うことは知らされていなかったことが分かる。この場合の「あら」の発音に注意。口まねをさせるとすれば「アーラ」や「アラー」にならないように。意味が微妙に違ってくる。「ほんとう？」は確認を求める軽い質問で、むしろ「そうですか」に近い。「ほんとう？」の発音も「ホントㇿ」と短く言っている。会話では「ホントー」「ホント」の両方が使われる。

⑤は③と同様、目的格の「わたし（たち）を」が略されていることは言うまでもない。「～が待っているんですか」の「んですか」は、③の「山田さんが待っているから」が正子にとって突然の情報だったので、軽いおどろきと共に、半ば反射的に、自らを納得させるような言い方で、下降調で言われている。これは「なるほど、そうなんですか」\と 同じ類である。

「の（ん）です」の文法的説明はむずかしい。一言で言えば「説明的判断」というムードを表すのがその基本的性格である。その場の状況（非言語的であっても）や文脈から話者が判断し、聞き手（や自ら）に説明し納得を求める言い方である。⑤の場合は「山田さんが待っているのか、分かった」という正子自身の気持を表す。したがって、

⑤' 山田さんが待っていますか。

と「の（ん）です」ではない言い方をしたとしたら、単なる叙述に近く、順子の「山田さんが待っているから」という情報を納得した応答とはなりにくい。脈絡上不自然ということになる。この「のです」については、「もみじが とてもきれいでした」の2.3.3.の解説やそこに挙がっている参考文献を参照されたい。

⑥の「ええ」は、この場合肯定を表す応答詞。「はい」と同義だが、「はい」よりは改まり（フォーマリティー）の度合が低く、「うん」よりは高い。したがって、親しい友人間でも少していねいな話し方を意図すれば出や

すい。敬語を多用する場面や目上には使わないほうがよいと考えられているが、あまりきびしく言う必要はないだろう。ただ「はい」と違い、名前を呼ばれて「ええ」と答たり、物をさし出しながら「ええ、どうぞ」とは言えないことは教える必要がある。

⑦の「～なくてはならない」は義務を表す連語。「～なければならぬ」「～ねばならぬ」（これは少し文語的）とも言える。会話では少しくずれて「～なくちゃならない」もよく使われる。語尾の「ない」の部分は「ん（←ぬ）」と言う場合もある。⑦「返す」の反対語は「借りる」だが、この二語は学習者の母語によっては学習しにくいことがある。動作の主体を中心とした物の移動の方向と、「～が～に～を返す」「～が～から／に～を借りる」という文型に注意させたい。（「返す」は②にも出る。）

[3] (私が) 図書館にこの本を返す。

[4] (私が) 図書館からこの本を借りる。

[5] (私が) 友だちから／にこの本を借りる。

「に格」と「を格」の名詞句、「から格」と「を格」の名詞句の位置は交替することがある。また「借りる」場合の「から格」と「に格」の違いは、「から格」が人・機関（組織）のいずれにも使えるのに対して、「に格」は原則として人の場合にしか使えないことである。「私から図書館にこの本を返す」という言い方もあるが、ここではそこまで広げないほうがよいだろう。

⑦の文の「ので」はこの映画で初めての提出。「から」と置きかえることも可能だが、「図書館の前で山田さんと会う」という事実を内容としている場合、および、あとにくる文がいていねいな形をとっている場合は「ので」が出やすい。これについては3.1.5.の解説を参照されたい。この「ので」は早口に言う場合「んで」となることもある。

⑦の「会うんです」の「んです」については、⑤⑥'の説明参照。ここでも「～ので、図書館の前で会います」と文末を「のです」ではない形にすると、〈質問—応答〉の場における言い方というより、話者の勝手な断言という性格が強くなってきて、文脈にそぐわない。この「のです」は、前件（S_i）

と後件 (S₂) を一つとした<文> (複文) 全体について話者の説明的な気持を述べるものと解釈していいだろう。すなわち、

[S₁+から/ので, S₂] のです。

という構造を持つ。

「会う」は、「～と会う」「～に会う」という二つの格助詞を取りうる。その使い分けは微妙である。これについては、森田良行『基礎日本語』(1977) がよい参考になる。

なお、⑦の文の文法的要素をすべて顕在化すれば、

⑦' (私は) (山田さんに) この本を返さなくてはならないので、(私は)
(彼と) 図書館の前で会うんです。

となるが、文脈上明瞭な主格や目的格をくり返すことは、③で触れたが、ごくへたな日本語、日本語らしくない日本語となってしまうことに留意させたい。

I-2 聖橋を渡りながら (⑧~⑪)

順子と正子の二人は駅前の雑踏を離れて、景色のひらけた広い通りに出てくる。左端に新聞スタンドが見える。つづいてコンクリートの防壁(欄干)のある橋を渡る。これが橋であるかどうかは、下がよく見えないのですからには分からないだろう。画面の左下、橋のたもとコンクリート壁に、「聖橋」(ひじりばし)と浮き彫りにした銅板のはめこみが見える。二人の背後には新緑の木々や高いビルが見える。画面中央上部、ビルの横に青みがかった丸屋根が見える。ニコライ堂である。正式名はニコライ教会堂で、ロシアの修道僧ニコライが樹立した日本ハリストス正教会の中央本部である。明治24年(1891)の建立。日本には丸屋根が少ないところから、市民に珍しがられ、親しまれてきた。

橋を渡りながら、前の順子のせりふ⑦につづけて、正子が言う。

正子「⑧あら、そう。

⑨何時に？」

順子「⑩一時十五分。」

正子「⑪ごめんなさい。」

⑧の「あら」は④と同じく感動詞。「そう」もこの場合は感動詞（副詞ではない）の用法で、相手の言ったことに対するおどろきや半信半疑の気持を表す。

⑩の「一時十五分」の発音に注意。文末の「フン」の部分在意図的にかなり高く発音し、「ン」さえも相当明瞭に発音している。これは「フン」にプロミネンスを置くことによって「一時十五分」という時刻をきわだたせ、「あなたが来たのは一体何時だと思っているのか。もう二十分過ぎだから、山田さんとの約束の時間に遅れてしまったのではないか。」という皮肉の気持を表そうとした発音である。

この「一時十五分」という返答から、②の「もう二十分過ぎよ」が「一時二十分過ぎ」を意味していたであろうと推測しても決して無理ではない。

⑪は軽く笑いながら「ごめんなさい」を上昇調で言っている。おわびの言葉を笑いながら言うのは親しい間柄、それほど重大な事柄でない場合に限られると言っていいだろう。「ごめんなさい」については、①の解説参照。

Ⅱ 大学構内で (⑫～⑳)

順子・正子の二人はある広場とおぼしきところに入ってくる。大学構内であるが、画面からはこれが大学構内であるとはすぐには分からないであろう。しかし、次の会話が生まれれば推測がつく。

Ⅱ-1 掲示板の近くを通りかかって (⑫～⑱)

構内に入ってから会話の始まる。

正子「⑫学校が始まったので、ずいぶんにぎやかになりましたね。」

順子「⑬ええ。」

⑭わたしたちの授業は、来週からですね。」

正子「⑮ええ。」

⑩「その掲示板に出ていましたね。」

(掲示板の横を通りかかって)

正子「⑪ちょっと掲示板を見ていきませんか。」

順子「⑫山田さんが待っているから、早く行きましょうよ。」

正子「⑬そうですね。」

⑭の「学校が始まった」は、言うまでもなく「学校の授業／講義が始まった」、あるいは「(学校の) 新学期が始まった」ことを指す。「学校が始まった」と言えば、常識的に、その前にある日数以上の休暇が続いていたことを示す。したがって、毎日の授業が(たとえば朝)始まることについては、「学校が始まる」とはあまり言わない。一方「学校が終わる」については、その日の授業が終了することについても、ある学校を卒業することについても使う。

ここでは、日本の学校が通常四月に始まり三月に終わることを解説しておくのもいいだろう。そこから「〇〇年度」という言い方と、暦上の「〇〇年」との違いについて触れておくのもいいだろう。

「にぎぶん」は常識的な程度を超えていることを意味する副詞。「にぎやか」は新明解国語辞典(第三版)によれば、三つの意味がある。①人や物がたくさん出そろって活気がある様子。「～な町」②人声や物音が盛んに聞こえる様子。「外が～だ」③(うるさいほど)陽気にしゃべる様子。「～な人」ここでは①の意味だが、すべてに共通していることは、少なくとも不快感は伴わないということで、「うるさい」との区別はしておく必要がある。反対語は「寂しい」がふつう。「～になる」は状態の変化としての結果を表す。「なる」については、「うつくしいさらになりました」の解説を参照。なお、この画面に映る学生たちの数からは、「にぎやか」という表現に疑問を持つ者が教師にも学習者にもいるかもしれない。程度は話者の心の中の前提に基づいている。

この⑦の文は、「にぎやかになった」という事実(結果)の理由ととして「学校が始まった」が挙げられ、その因果関係が「ので」で表されている。

主文が客観的事柄である時は、「ので」を使って不自然にならないことは、すでに⑦で触れたが、その事柄が過去形で表されれば、いっそう事実性・客観性は増す。この場合「から」も可能。ただし、「から」だと改まりの程度・荘重さは減少する。

⑭の「来週からですね」の「から」は、出発点を表す格助詞。この映画の主題が接続助詞の「から」で、語形が似ているところから、学習者のレベルによっては、思わぬ混乱を与えないとも限らない。〈名詞句+から〉と〈文+から〉の違いに注意させたい。

[6] 3時から (始まる)

[7] 3時だから (もう帰ろう)

「来週からです」の「です」(「だ」も同様)については議論の多いところだが、「(来週から) 始まります」の代用(縮形的)として扱うのが分かりやすいだろう。このような「です」の用法が学習者にとって初出のものであれば、次のような例で、「です」が前に来る文の述語の代用機能を持っていること、日常の話しことばでは極めて頻度が高いことを説明しておくのがいいだろう。

(質問) あなたはどこから来ましたか。

(答え) a 私はタイから来ました。

b 私はタイからです。

c 私はタイです。

(質問) (あなたは) お昼に何を食べましたか。

(答え) a (私は) お昼にソバを食べました。

b (私は) (お昼に)? ソバをです。

c (私は) (お昼に) ソバです。

このような解釈にしたがえば、「です」は格助詞をふくめた述語の代用をし、その述語が表しているテンスまでも取りこんでしまう機能を持っている。質問の文が過去形だから学習者は「私はタイ(から)でした」と言いたくなるが、これは特別な文脈でなければ許されない。また、「です」の前の格助詞

は残りやすいものと残りにくいものがある。「を」「へ」「で」などは残りにくい。残れば強調（取り立て）の意味が強くなる。

注意したいのは、学習者はこれを覚えると乱用するきらいがなきにしもあらずということである。前の文がどんな述語形式であっても代用できるというわけではないからである。たとえば「～ましょうか」というような文ならだめである。また、日本語には分かりきったことはくり返さない性質があると言っても、あらたまった、ていねいな言い方が必要な場合は、むやみに「～は～です」という形に簡略化することはできない。この「～は～です」という名詞文（分裂文）についての考察は、奥津敬一郎『「ボクハウナギダ」の文法』（1978）にくわしい。

⑩の「そこ」は、〈二人がいっしょに〉いるところから少し離れたところ（と言っても、すぐ近く）を指す。学習者が「そこ」について聞き手に近いところのみ理解しているとすれば訂正してやる機会である。学習者は「あそこ」と言いがちだが、「あそこ」はもっと離れていなければならない。しかし、目で確かめられる空間指示であっても、二人が同一の場所から見て、どのくらい離れていれば「そこ」であり、どのくらい離れていれば「あそこ」であるかは簡単には説明ができない。コソアドについては、国立国語研究所『日本語の指示詞』（1981）を参照されたい。

⑪「掲示板に出ていましたね」の「出ている」の主語はどう考えるのがよいか。具体的には「（授業についての）掲示が／はり紙が」であろうが、画面から見てとることはできない。もっと抽象的に「そのことは」とか「われわれが今話題にしていることは」と考えてもいいだろう。「掲示板」は「掲示を出す」場所であるから、「掲示板に掲示が出ている」などと言う必要はない。「新聞に出ている」もいちいち「ニュースが」などと言わないのと同類である。「出ている」は「窓があいている」などと同じく〈動作・作用の結果の現存〉と考えていただろう。この「～ている」については「きょうはあめが ふっています」の解説を参照されたい。

⑫の「～ませんか」は勧誘の表現であるが、相手の意向を尊重しつつ行う

誘い。「～ませんか」「ましょう」については、「おみまいに いきませんか」の解説参照）「ちょっと」は時間・分量・程度などが少ない様子を表す副詞であるが、ここでは、相手に大きい負担（迷惑）をかけまいとする配慮に基づいた使い方。「ちょっと」自体は文脈により多義的である。「そんなことはちょっと考えられない」などはふつうの場合には、「ほとんど～ない」に近い。「ちょっとした～」という連体用法も、「ちょっとちょっと」のような呼びかけの用法もある。時間に関係する場合だけ見ても「少し」と「しばらく」との違いは問題になりやすい。

- [8] a ちょっと待ってください。
b 少し待ってください。
c しばらく待ってください。

などは、a b cの順で待ち時間が長くなるニュアンスを持つ。しかし、

- [9] a ちょっと行って来ます。
b 少し行って来ます。
c しばらく行って来ます。

では、bはあまり言わないだろう。「少し行く」という言い方が、時間よりむしろ距離に言及する意味合いが大きくなるからであろう。「～ていく」については「なみのおとが きこえてきます」参照。

⑱の「山田さんが待っているから、早く行きましょうよ」は、③の「山田さんが待っているから、急ぎましょう」と同じく、主文が意志（誘い）の場合。「よ」はかなり高く発音されている。この「よ」があるとないとでは誘いかけの強さがまるで違う。しかも、この順子の発言は正子をまともに見ないで下を向いて言っている。そして、この⑱の文は、正子の⑰の提案に対する意味上の否定の答えである。「いいえ」のような否定のことはこそ使われていないが、「掲示板を見て行く」ことができない理由を、逆提案の形で答えたものである。

⑱の「そうですね」を正子は＜笑いながら＞答えている。これは、③で山田さんが待っているからと、言われたことを忘れていたことに対する照れか

くしと言っていいだろう。したがって、「そうですね」は順子の⑱の返答がもっともであると首肯したことを意味する。文末の「ね」はこの場合切り離せないと言っていい。ここで「ね」がなければ、相手の言ったことを認めただけで、自分も共に行動するという感じは出てこない。

Ⅱ-2 山田と会って (⑳～㉑)

石垣にもたれて一人の男性が所在なげに立っている。下を向き、なんとなく固い感じである。山田である。そこへ順子・正子の二人が現れる。

順子「⑳ごめんなさい、遅くなってしまって……。」

山田「㉑やあ。」

正子「㉒わたしが遅れたので、遅くなってしまいました。」

⑳すみません。」

順子「㉓これ、どうもありがとうございます。」

山田「㉔ああ、どうも。」

㉕(正子に)今日は、何か用事がありますか。」

正子「㉖いいえ、この本を図書館に返すだけです。」

㉗は、①の正子のおわびの言い方と全く同じ。①のように、文頭に「ああ」がないのは、しばらく前から、すでに山田の待っている姿を認めているからである。①で述べたように、語順に注意。

㉘の「やあ」は出会いがしらの軽いおどろきを表す感動詞。親しい間柄、または下位者に対してのみ使われる。女性が使うことは少ない。呼びかけにも使われる。「やあ、しばらく」「やあ、君たち！」など。

㉙の「わたしが遅れたので、遅くなってしまいました」は、前件(従属文)と後件(主文)の主語の違い、および「遅れた」と「遅くなって」とはそれぞれ基準とする時刻が異なることに注意。「わたしが遅れた(ので)」は、正子と順子が約束した駅前での待ち合わせ時刻に正子が遅れたこと、「遅くなってしまいました」は、正子の遅れが引き金となって、順子と山田が約束していた図書館前での待ち合わせ時刻に遅れたことを表す。後件のか

くれた主語は「私たちがここへ来るのが」となろう。したがって、文全体として、〈遅れたのは自分に責任がある（順子にはない）〉という言い方になっている。この文の「ので」は、主文が「遅れた」という事実描写であること、また、つづいて「すみません」と言っているように、遅れをわびる改まった気持の表現であることを示している。したがって、「から」は適当ではない。これについては3.1.5.の解説参照。

なお、この文の「遅れる」と「遅くなる」（形容詞連用形+なる）との違いが問題になるかもしれない。「遅れる」は規準となる一定の時刻（または、事柄）よりあとになることを表し、「遅くなる」は形容詞「遅い」が意味するように、a) ほかの人・物より時間がかかる様子、b) 期待される、あるいは許容される時刻よりあとになる様子を表す。「遅れる」と「遅くなる」の格助詞に注意させたい。

- [10] a (人)が学校に遅れる（始業時刻に）
b 電車が遅れる（到着時刻に）
c 一着に三メートル／三秒遅れる（距離・時間）
- [11] a テンポが遅い→遅くなる
b 開始時刻が遅い→遅くなる
c ここへ来るのが遅い→遅くなる
d 夜、遅く→夜、遅くなって

「なる」については、「うつくしいさらに になりました」の解説を参照されたい。

なお、「～てしまう」については、①の文で少し触れたように、完了を表してはいるが、

- ②' a ～ので、遅くなってしまいました。
b ～ので、遅くなりました。

を比べると分かるように、bは単に事実の報告という感じを与えるのに対し、aは申しわけないとか残念だという話者の気持が付加されていることが感じとられるであろう。

㉓の「すみません」は、イントネーションが上昇調であり、特に語尾の「ン」が極めて高く明瞭に発音されている。おわびの気持ちを強く表そうと意図した結果である。正子は、このおわびのことばを頭をちょこんと下げて言うが、ことばと態度・表情がちぐはぐな感じを与えるかもしれない。この文の「すみません」は「ごめんなさい」と同じだが、「ごめんなさい」がもっぱらおわびのことばとして使われるのに対し、「すみません」は人と交渉を開始するときにも使われる。次の言い方は「ごめんなさい」で置きかえることはできない。

[12] すみません(が)、マッチをかしてください。

㉔の「これ」は、画面で分かるとおり「この本」。文法上は「これをどうもありがとう」であるが、この「を」は会話では落ちやすい。「ありがとう」はその対象が物である場合は「を」、行為である場合は動詞の「～て」の形。

[13] a おみやげををありがとう。

b 来てくれて、ありがとう。

なお、「～は、ありがとう」については㉕で取り上げる。

「どうも」はこの場合「ありがとう」「すみません」「失礼しました」「申しわけありません」などと結びつきやすい一種の強調の副詞であるが、文脈上多義的である。次の㉕の「どうも」を見られたい。

㉕の「ああ、どうも」の「ああ」は、①の「ああ」や、「ああ、そうか」の「ああ」と同じく、不意の確認・軽いおどろきを表す感動詞。「どうも」は、ここでは「どうもありがとう／すみません／……」などの圧縮表現と言ってさしつかえないが、本来＜多言を費しても自分の気持ちをうまく表現できない＞の意を基本に持っているので応用範囲は極めて広い。一例をあげれば、次のようである。

[14] a やあ、どうも。(出会い)

b それでは、どうも。(別れ)

c このあいだは、どうも。(感謝・わび)

d 本日は／このたびは、どうも。(祝い・弔い・その他)

e なんとも、どうも。(表現のしようがない)

以上のように<表現>の簡略化であり、便利ではあるが、話し手の判断停止、表現への努力の回避の性格を多分に持っているので、片言日本語にならないように注意したい。「どうも」はさらに次のような用法もある。

[15] a どうも分からない／うまくない。

b どうも困った／おどろいた／変だ。

c どうもかぜをひいたらしい。

⑳の「今日は」の「は」は、取り立て(主題化と考えても、対比と考えてもよい)。「何か」は不定の物事をさす代名詞的用法の連語。「何か書く／読むもの」「何か飲む／食べるもの」「何かおいしい／つめたいもの」など。

「用事があります」は「用事はありません」と共に頻度の高い表現であるから、一かたまりの慣用句のように扱いたい。「ある」という動詞は物事の存在を表すのが基本であり、この「ある」でいわゆる「所有」をカバーしているのが日本語である。狭義の所有は「持っている」であるが、「ある」に比べると用法の範囲はかなり狭い。したがって、「ある」が「存在」であるか「所有」であるかを無理に区別することは実際上あまり益がない。一般に、

a (人)は(人、物)がある

b (場所)には(物)がある

の型を取ることが多い。「(人)には」の型を取ることもちろんあるが、人の場合に「に」を明示すると、対比・強調の意味が強くなる。「～がある」と「～がない」については、3.4.を参照。

㉑の「この本を図書館に返すだけです」の主語は、「用事は」と考えてい
いだらう。学習者にとっての新しい学習項目は文末の「～だけです」の用法
であろう。「だけ」は限定を意味する助詞とされ、「ばかり」「ぐらい」「ほ
ど」「しか」などと同様、いわゆる副助詞と呼ばれる範疇に入れられている。

「だけ」は名詞や用言の連体形を承ける。主語を明示して「私の用事は～返

すだけです」とすれば、いわゆる名詞文型で「～返す（こと）だけが、私の用事です」と言い換えられる。文脈によるが、「AはB（だけ）です」は、「B（だけ）がAです」と言える場合が多い。しかし、⑭の「来週からです」で説明した文法が分かっているとすれば、この場合も、次のような説明にとどめておくのがいいだろう。

〔16〕（質問） みかんをいくつ食べましたか。

（答え） a みかんを三つだけ食べました。

b 三つだけ食べました。

c 三つだけです。

「食べたのはいくつですか→（食べたのは）三つだけです」という練習の可否は学習者の既習の知識の程度によるだろう。

〔17〕（質問） 何か買いますか。

（答え） いいえ、見るだけです。

のような表現も学習者にとっては早く習得したい項目だろう。

Ⅱ-3 神田へ行く相談 (⑳～㉓)

正子の返答⑳を聞いて、間髪を入れず次の会話が続く。

山田「㉒じゃあ、三人で神田へ行きませんか。」

正子「㉓ええ、いいですよ。」

㉓ どうして神田へ行くんですか。」

山田「㉓日本画の画集を買いたいからです。」

㉒の「じゃあ」は、「では」のくずれた形。日常よく使われるが、改まった場面では多用しないように注意したい。「本じゃありません」などと同様、書きことばでは、文章全体の調子にもよるが、一般に使わないほうが望ましいことも一言つけ加えたいものである。「三人で」の「で」は、ここでは動作がどういう状態で行われるかを表す格助詞。「みんなで（読む）」「千円で（買う）」「あしたで（締め切り）」などと同類。「～ませんか」は㉑と同じ。ただしここでは下降調で発音されていることに注意。

⑳の「いいですよ」は相手の提案に賛成するの意。終助詞の「よ」は賛意の強調と言ってさしつかえないが、親しい間柄のもの。「ね」より強いひびきを持つので、改まった場面や目上に対しては使わないように指導したい。また、女性が「よ」を使う時はその上接語の形に注意が必要。そうでないと男のこぼのように乱暴になる危険がある。これについては三尾砂『話しこぼの文法』（1958）を参照されたい。

㉑「どうして神田へ行くんですか」の「どうして」のアクセントは「ド」が高い。「どんな理由で」を意味する副詞。「なぜ」と同意だが、「なぜ」は話しこぼでは堅い。「どうして」は手段・方法にも使われるが、このほうは「どうやって」がふつう。また「どうしても」とは意味が全く異なる。この文では「どうして～の／んですか」の型になれさせたい。「～んですか」については㉕ ㉗参照。

㉑ どうして神田へ行くんですか。

㉑' どうして神田へ行きますか。

を比べれば、㉑'は「どうして」ということばがあるとはいえ、説明を求める気持というよりも、相手に対する詰問の感じが出てしまうおそれがある。

㉒の「～からです」は、㉑の「どうして～んですか」に呼応する。「どうして」と聞かれて、その答え方にはふつう三通りある。

（質問） Q どうして〔結果〕んですか。

（答え） a （なぜなら）〔理由〕から、〔結果〕んです。

b （ぜなら）〔理由〕からです。

c （なぜなら）〔理由〕んです。

㉒はこのbの型を採用したもので、最もふつうであろう。文頭には「なぜなら」のほかに「なぜって／どうしてかと言えば／どうしてって」など「どうして」を受けとめる接続語を置くこともできるが、生き生きとした会話ではしばしば余計である。同時に、質問者が使った〔結果〕を表す部分を応答者がもう一度繰り返して答えるのも、簡潔な話しの運びにはそぐわない。

なお、「～からです」と「～の（ん）です」を比べると、「からです」のほ

うが、意味上、原因・理由を表すことに限られているのに対して、「のです」のほうは、それ自身が原因や理由を表すのではなく、

〔(理由) から、(結果)〕のです

のように〔 〕内、つまり、〔理由+結果〕の全体を話者が説明する気持の強い表現である。この「のです」自体は、〔(理由) から〕にも〔(結果)〕のどちらにも接続しうる。例えば「雨が降ったから、一日中家にいた」という事実を「のです」を使って伝えたいとき、質問者が理由または結果のどちらを問うかによって、

[18] 〔雨が降ったからな〕のです。

[19] 〔一日中家にいた〕のです。

と答えることが可能である。

Ⅱ-4 桜を見に行く相談 (㉔~㉖)

山田が二人をさそって神田へ買い物に行きたいと提案したのを受けて、順子はそれを機会に「散歩」を提案し、さらに正子はもう少し具体的に「桜を見に行く」ことを提案する。

順子「㉔今日は、お天気がいいから、散歩をしましょうよ。」

正子「㉕神田へ行ってから、桜を見に行きましょうよ。」

山田「㉖それはいいですね。」

㉔の「～から、～ましょう」は、㉕㉖と同じく勧誘を表す場合。「ので」は不適当。「形容詞+から」は、親しい間柄では、「(形容詞)ですから」というていねい化はしにくい。(3.1.1.参照)

㉔㉕の文末の「～ましょうよ」の「よ」は誘いの気持を強く表わしたもので、両文ともかなり高く明瞭に発音されている。ただし、口まねをさせる場合は、平板調や上昇調にならないように注意が必要である。

㉕の「神田へ行ってから」の「～てから」は、「～たから」との違いに注意させたい。この文での誤解はあまりないと思われるが、「～てから」と「～たから」とは語形(音形)が似ているので、その意味上の区別も間々誤

解していることがある。「～てから」は時間的前後関係（継続）を表わす言い方である。次のような例は誤解していることがしばしばある。

- [20] a 雨が降ってから、洪水になりました。
b 雨が降ったから、洪水になりました。
- [21] a 学校が終ってから、映画を見に行きました。
b 学校が終ったから、映画を見に行きました。

時間的前後関係として成り立つ事象を因果関係として表現する場合は特に「て/te」「た/ta」の区別があいまいになりがちである。(3.1.2.参照)

なお「桜を見る」は「桜の花を見る」ことであることは言うまでもない。この「花」を言わなくてもすむものは「花を見る」ことが習慣上主要な目的となっている植物に限られる。「きく」「あやめ」「つつじ」などがその例である。また、「花見」といえば、その「花」はふつつ桜の花のことである。「桜」については場面Ⅳ参照。

③④の「それは、いいですね」は相手の提案に賛意を表す言い方。「それは、いい考えだ」の意味を含んでいる。「それは」は省かれことも多い。「いいです」自体は文脈、場面により極めて多義的である。

Ⅱ—5 それぞれの用事を済ませてから (③⑤～③⑧)

山田の賛成を受けて、すぐに次の会話が展開する。

正子「③⑤じゃあ、わたし、この本を図書館に返してきますから、ちょっと待っていてください。」

順子「③⑥わたしも、さっき掲示板を見る暇がなかったので、ちょっと見えます。」

山田「③⑦じゃあ、ぼくは、ここで待っていますから、早く行ってきてください。」

二人「③⑧ええ。」

③⑤「～から、～ください」は、文末が命令形をとる依頼文の場合。「～ので」は不適當。「じゃあ」は前文③④を受けて、話し手が次の思考・行動に移

いう目的を表わす部分が省かれている場合、意味上の不完全さを感じずからである。この文で山田は二人に向かって、「早く行ってきてください」と言っているが、二人のそれぞれの行く目的は異なる。正子に対しては「(本を図書館に返しに) 早く行ってきてください」であり、順子に対しては「(掲示板を見に) 早く行ってきてください」である。

㊸の「ええ」は二人ともかなり短く発音している。

Ⅲ 古本屋街で (㊸～㊿)

画面は一転して、たくさんの看板が出ている神田の古本屋街に変わる。店の看板から「書店」かどうかを読みとるのは時間上むずかしいであろうが、ぎっしり詰まった書棚や平積みの本から、これが書店であることはすぐ分かる。神田は、皇居を近くにひかえて東京のほぼ中心に位置する。「神田」は旧区名。現在は千代田区の一部。書店が密集しているのは、その神田の神保町界限。世界有数の大書店街と言われている。したがって、学生や研究者にとっては、日本人と外国人とを問わず、憧れの町である。昔は古本屋ばかりだったと言われているが、現在では新刊書店にくらがえしたものも多い。画面で三人が出入りするの、神保町の古本屋だけ。

書棚に平積みで入れてあるのは、本をできるだけたくさん入れるためであり、また、和書(和綴じの本)は平らに置くのが常識である。平積みの本は書名が分かりにくいし、取り出すのも困難だから、細長い短冊形(たんざくがた)の紙に書名や値段を書いてぶらさげている。古書店の特徴と言ってもいいだろう。ここで山田がお目当の本をさがそうとし、二人がつき合う。

Ⅲ-1 画集を見ながら (㊿～㊻)

お目当の本が画集であるから、美術書の多い(あるいは専門に扱っている)書店を選んで入はいったと言っているだろう。大形の本が多いことでもそれが分かる。山田は本棚を見ている。順子は自分の見ていた画集を書棚にもどすと正子が画集を見ているところに来て、その画集をのぞいて、言う。

順子「㉞あら、これは、わたしがいま見ていた絵とよく似ているわ。」

正子「㉟そう？」

(順子、見ていた画集を取ってきて、正子に開いてみせる。正子、見くらべる。)

正子「㊱よく似ていますね。」

㉞の「あら」は「アーラ」とかなり長く発音されている。意外性を強調する言い方である。「いま見ていた」の「いま」は、現在進行中の瞬間を表す「いま」ではなく、現在の時点に多少の幅を加えたもので、現在を中心とする前後何分か(何十分か)を含む「いま」である。この場合「たったいま」という過去に属する。「見ていた」は過去における一定時間の継続。「似ている」の基本形(辞書形)は「似る」であるが、文中で「似る」「似ます」という形は例外的にしか使われず「似ている／似ています」の形をとって、形容詞的に状態を表す特殊な動詞である。また、要求する格は「と」「に」の二つを取りうることで面倒な動詞である。「～と似ている」「～に似ている」の違いをここで詳しく述べる余裕はないが、多くの場合「と」のほうが似ている対象物を臨時的な対象ととらえているのに対し、「に」のほうは固定的(ないし恒常的)な対象としてとらえている。つまり「～と似ている」は似ている対象がいくつもあるもののうちの一つを例としてあげるニュアンスが強いのにに対し、「～に似ている」は、それにいちばんよく似ている、似ている例としてぴったりだ、というニュアンスが強い。なお、ここで「同じ」「違う」を教えるのもいいだろう。ただ、「同じ」は形容動詞型活用だが連体形が「同じ」であること、「違う」が動詞であること、両者とも格助詞はふつう「と」をとることを指摘しなければいけない。

順子の「似ているわ」という文末のふつう体表現は、この場面では極めて自然であるが、この映画が「です／ます体」を基調としているところから見ると例外的である。この段階の学習者には、ふつう体をも発表力として要求することは無理があり、待遇表現上危険であるから、聞いて分かればよいという程度に止めておくべきだろう。また、ふつう体にはさまざまな終助詞や

イントネーションの複雑さが要求され、自然な発音を獲得するのはていねい体よりもはるかにむずかしいので、かりに学習者が学習を要求したとしても、理由を説明し、もっと後にすべきであろう。使い分けることができれば、すでに日本語に上達したことを意味する。女性ことばの形態的なまとめとしては、三尾砂『話しことばの文法』（1958）がよい参考になる。

④⑩の「そう？」は、「ソーオア」と発音されていることに注意。疑問を表すことももちろんだが、女性に多いイントネーションであり、また、親しい間柄の言い方であることに留意させたい。ていねいには「そうですか」。

④④の「よく似ていますね」の「ね」は「ネー」と長く発音され、確認・納得・同意の気持を表している。

Ⅲ—2 買いたい本がなくて (④②～④⑥)

順子と正子が画集を見比べているところへ、山田が来る。山田に本を買ったらしい様子は見えない。

順子「④②あら、本は、なかったんですか。」

山田「④③ええ。」

④④この店にはないので、他へ行ってさがします。」

順子「④⑤ええ。」

(順子、書棚に本をもどしてくる。)

順子「④⑥お待ちどおさま。」

④②の「あら」は「アラア」と短く発音され、おどろきの気持を表している。③⑨の「あら」が「アーラ」と長く発音されたのとの違いに注意。「本は、なかったんですか」の「本がある／ない」については、③⑥の「暇がなかった」および3.4.を参照。「～のですか」の部分は「本は、ありませんでしたか」と比べてみると分かるように、その場の状況（本屋で、目当の本を探す。画集はたくさんある。そのことを話者も知っている）を文脈として、本を買った形跡のないことについての説明を求める気持が表れている。「本はありませんでしたか」であれば、単なる質問か、その状況の再確認にすぎな

いのと対照的である。

④⑨の「ええ」は否定疑問の「なかったんですか」に対する返答であるから「はい、ありませんでした」と同じ。これまでの「ええ」(⑥⑬⑮⑲⑳㉓)は、すべて、同意ないし肯定の意味で使われていた。「はい」も「ええ」も質問の形式自体について「あなたのおっしゃる通り」を表し、「いいえ」は同じく質問の形式自体について「あなたのおっしゃるのとは違って」を表すのが原則であるから、話者の内容上の肯定、否定は、そのあとで明示されることがのぞましい。

- | | | | |
|------|-----------|---|----------------|
| [26] | もう買いましたか。 | { | はい／ええ、もう買いました。 |
| | | { | いいえ、まだ買いません。 |
| [27] | まだ買いませんか。 | { | はい／ええ、まだ買いません。 |
| | | { | いいえ、もう買いました。 |

④「～ので、～ます」は、これまでの類似の型(意向・決心を表わ文)を参照。この文では「から」で置きかえることも可能。ただし、改まりの度合いは低くなる。従属文、主文ともに主語が表されていないことに注意。従属文(前件)は「(場所)に(物)がある／ない→(物)は(場所)にある／ない」という存在文の型を取っており、「(物)は」が略され、「(場所)に」を「は」によって取り立てた型を用いている。「他へ行って」は「他の店へ行って」。「さがす」は「みつける」との差が問題になるかもしれない。「さがす」は、大体の見当をつけた場所を、動きまわって、目的物をさがし出すことに重点があり、「みつける」は、どこでもいいが、求めているもの、ほしいものの存在を知ること重点がある。

④⑤の「ええ」は山田の提案④(意志の表明)に対する同意。

④⑥の「お待ちどおさま」は相手を待たせたことに対するわびを表すあいさつ語。ただし、敬度はあまり高くない。ていねいに言うなら「お待ちどおさまでございました」だが、「お待たせいたしました」のほうが「お待たせ」という連語(敬語)があるだけ、わびの度が高いと考えられている。「お待ちどおさまでした」も使われる。親しい間柄では「お待ちどお」だけのこと

もある。順子はこのことばをだれに向けて言ったのか、画面では必ずしも明らかではないが、山田に向けたものと考えていだろう。なぜなら、正子もまた本をもとに戻しており、順子よりむしろ遅いくらいだからである。実際それほど待たせたわけではないが、学習者はこんな短い時間にさえ「お待ちどおさま」と言う必要があるのかと疑問に思うかもしれない。これは、画面から判断して、順子の本をもどす場所が、山田・正子のいる場所より奥まった場所なので、多少待たせたと思ったからと言っていいであろう。あるいは、現実の時間の長短よりも、順子のエチケットとしての気持の表れだと言ってもいいだろう。これが「お待ちさせてすみません」だったら、待たせた時間が実際上もっと長くなければ不自然なものとなる。

Ⅲ—3 本をさがして(1) (④⑦～⑤①)

最初の本屋にさがしている本がなかったの、三人は外に出てくる。

山田「④⑦その店は、どうかな。」

(三人、隣りの書店に入って行くが、ほとんどすぐに出てくる。)

順子「④⑧ありませんね。」

正子「④⑨ないですね。」

山田「④⑩あっちへ行ってみましょうか。」

順子「④⑪ええ。」

④⑦の「その店」は、三人から<すぐ近く>の店。実際には隣の店。もし三人が目当の店の前にいるとすれば「この店」となる。④⑩の「そこの(掲示板)」を参照。なお、聞き手には不明だが、話し手の心の中にある<すぐ近く>についての表現、たとえば「どちらへ?—ちょっと、そこまで」も同類。「その店は、どうかな」は文脈上、「その店(に)は、(さがしている本があるか) どうかな」と解釈できないことはないが、話しの流れに沿って、もっと端的に「～は、どう(かな)」と主題とそれに対する疑念や提案の文型として指導していだろう。「どうかな」は疑念の表明として使われており、「かな(←か+な)」の「な」が「ナー」と長く発音されることによ

って、一層その疑念を強めている。親しい間柄の用法であり、一人言的な発言に近いことに注意させたい。なお、「かな」の「か」は疑問（質問）の助詞、「な」は詠嘆（感動）の助詞であり、両者が結びつくと、話者の疑問・疑念を自らに向けさせる性格を帯びてくる。

④⑧で順子が「ありませんね」、④⑨で正子が「ないですね」と同じ事柄を別の語形（動詞と形容詞）で表現している。分かりきった主語は省かれると同時に、さがしている本がなかったこともまた三人にとって分かりきったことなので、この二人の表現は互いの確認よりもむしろ「残念ですね」という気持を表していると見るべきものであろう。この場合の「ね」は不可欠と言ってもよく、この「ね」がなければ本をさがしたことの結果の報告にとどまり、この場面では使えないものになってしまう。

⑤⑩の「あっち」は三人から離れた方向を漠然と指している。「あちら」とすればいいのだが、女性的にもなる。学習者が知らなければ「こっち—こちら」「そっち—そちら」も同時に取り上げていいだろう。「行ってみる」の「～てみる」は、この場合、何らかの解決を期待して、とりあえずそのことを試みる意を表す。「読んでみる」「考えてみる」などと同じ。「～てみる」には他の用法もあるが省く。「～ましようか」は相手の意向を聞きつつ行う勧誘。

Ⅲ—4 本をさがして(2) (⑤⑨～⑥⑩)

この場面では、つぎつぎと本屋を変える。三人は歩き出して、まず、**GANSHODO**（厳松堂）とローマ字の店名が見える店に入る。「古本買入れ」のはり紙も見える。本をさがしている画面はなく、出てきてすぐまた別の本屋に入る。ショーウィンドーのガラスの上に「古本高価買入」と白く書かれている。この店からもすぐに出てくる。

山田「⑤⑨ああ、疲れた……。」

順子「⑥⑩どうして、ないのでしょうかね。」

山田「⑥⑩古い本だからです。」

順子「⑤⑤ そうですね。」

山田「⑤⑥ 疲れたので、もう本をさがすのは、やめます。」

正子「⑤⑦ (山田に向かって) せっかく来たのだから、もう少しさがしてみませんか。

⑤⑧ (順子に向かって) ねえ？」

順子「⑤⑨ そうですね。」

⑥⑩ あの店に入ってみましょうよ。

⑥⑪ ね。」

⑤②の「ああ、疲れた」は山田の一人言に近い表現。むろん聞こえることは承知の上。これが「疲れました」であれば、はっきり相手に聞かせるためのものとなる。「た」は一般に過去または完了の助動詞とされているが、この場合、ある事柄が実現し、その結果が現に継続し確認できることを示す。

[28] ああ、お腹がすいた／これで、元気が出た／困ったなあ
などと同類。

⑤③の「どうして、ないのでしょうかね」の「ね」は「ネー」と長く発音され、疑問を和らげる機能を果すと同時に、同情の気持を表している。「どうして、～のです(か)」については⑤⑩を参照されたい。「のです」(前出「んです」④⑦⑤④参照)が断定的ムードを表すのに対し、「のでしょうか」はていねいな推量のムードを表す。「だろう」「でしょう」は推量を表わすとはいえ、日常会話では、聞き手の目の前にあり、はっきり確認できるものに対しても「～じゃないか／～じゃありませんか」とほとんど同義で使われる場合もあることは指摘しておいたほうがいいだろう。たとえば、ある物を指して「ほら、ここにちゃんとあるだろう／でしょう？」など。

⑤④の「古い本だからです」は⑤⑩の「～買いたいからです」と同様、「古い本だから、ないのです」の理由の部分(従属文)を一文としたもの。3.1.1. 参照。

⑤⑤の「そうですね」は下降調で発音され、⑤③のせりふに対し「なるほど」の意を表したものの。

⑤⑥の「～ので、～ます」は、③④と同様、理由に基づく意志（決意）の表明。「から」でもよい。副詞「もう」は「本をさがす」にかかると見ることもできるが、文末の「やめます」にかかると考えていいだろう。残念ながら発音からはそれがはっきりしていない。「やめます」の「ます」はかなり高く発音され、断言の気持を強く表している。「本をさがすのは」の「は」は「を」の代行。名詞（句・節）化の「の」については3.2.を参照。

⑤⑦の「せっかく来たのだから、もう少しさがしてみませんか」は理由を明示して、次の行動を起こさせようとする勧誘の表現。この「ませんか」の部分が「ましようか」であるとしたら、勧誘の意よりも話し手が自らの意向について相手の承諾を求める言い方となり、この場にそぐわない。なぜなら、山田にあきらめさせないで、さらにさがす努力をさせ、それに協力しようという提案（いわば友情の表れ）だからである。このことは「せっかく」ということばを使っていることや、「もう少し」の部分にプロミネンスを置いた言い方に表れている。「せっかく」という副詞は説明しにくいことばの代表だが、簡単に言えば、ある努力に基づいて、ある事柄が実現したり期待に応えてくれることを強く望む気持を表す。「わざわざ」とか「そのつもりで」に言いかえられることが多いのもこれにより、相手を説得しようという意図のある時や自己の内心を吐露しようとする時によく使われる。したがって、「せっかくの～」という名詞的用法や「せっかく～のだ／のです」という型以外は単文にはあまり使われない。

[29] ×せっかくここまで来ました。

せっかくここまで来たんです。

せっかくの休日を仕事でつぶした。

[30] せっかくここまで来たんですから、……

せっかくここまで来たのに、……

せっかくの休日にもかかわらず、……

[30] のように従属文に多く現れ、話者が何を期待しているかは主文で示唆される。「来たのだから」の「のだ」についてはこれまで何回か触れた。

「もう少し」は「もう少しの時間をかけて／もうしばらく」ととっても「もう少し多くの店を」ととってもどちらでもいいたろう。

⑤⑧の正子の「ねえ」は順子に向かって「ネーエ／」とかなり高く発音されている。自分の提案に同意を求める言い方である。つまり、この提案は自分一人ものではなく、順子も同じ考えを持っているのだということを順子に確認し、同時に山田に向かって、だからあきらめるのはよそうと言っているわけである。「ネーエ／」というような三拍に近い発音は多くの学習者にとって苦手であろう。

⑤⑨の「そうですよ」は正子の意向に積極的に賛成する言い方。

⑥⑩の「あの店に入ってみる」の「～てみる」については⑥⑩の「(行って) みる」と同じ用法。「ましょよ」は話し手の意志を強く押し出す勧誘。「よ」が重要な役目を果たす。「ましょうか」であつたら相手の意志を尊重する言い方。

⑥⑪の「ね」は高く短く発音されている。誘いのための再度の念押し。

Ⅲ—5 本が見つかって (⑥⑫～⑦⑩)

前の場面で順子が「あの店」と指した店に入る。天井まで届く高い棚に無数の本が平積みされている。奥に背広にネクタイで座っているのは店員(店主?)。書棚を見まわしていた山田がすぐ手もとの本に気づく。

山田「⑥⑫ああ、(ちらっと二人を見て) ありました。

(画集を手にとって書名を確かめ、画面では見えない二人に向かって)

⑥⑬これです。(と言いながら少し開いてみる。)

⑥⑭お金を払ってきますから、ちょっと待っていてください。」

二人「⑥⑮はい。」

(順子、正子の二人は、ほぼ同時にある本に気がついて、かすかに「ああ」というおどろきの声をあげ、手に取って開いてみている。その間に——)

店員の声「⑥六百円のおつりです。

⑦ありがとうございます。」

山田「⑧お待ちとおさま。

⑨さあ、本は、買ったから、桜を見に行きましょう。」

二人「⑩ええ。」

⑫の「ああ」は軽いおどろきを表わす感動詞。「ありました」とていねい形で言っているのは意識的に二人に知らせるため。二人のほうを見てから発している。「た」はいわゆる<確認>（発見）の「た」。「あ、電車が来た／来ました」「あしたは、試験があった／ありました」などと同類。<いま、視界に入った><いま、気がついた>などの意味を表す場合に多く使われる。「ああ、ここにあります」ではおどろき、よろこびなどの迫真感・現実感はうすいものとなる。⑬の「ああ、疲れた」の「た」と同類と解釈するか否かは人によって異なる。

⑭は「～から、～ください」は⑮⑯と同じく依頼文における「から」の用法。「ので」は不適當。「払ってくる」の「～てくる」については、⑰の「返してくる」、⑱の「見てくる」、⑲の「行ってくる」を参照。「ちょっと」については⑳で触れた。

山田が代金を払いに行っている間、順子と正子は何かの本に気づいて、軽く「ああ」というおどろきの声をあげ、一冊の本を手にとって開けてみている。これは和綴じの「浮世絵冊子」。原本か復刻本かは分からない。日本の古い本の一つを紹介するためだろう。どの頁も見開き二頁にわたり、下約三分の二が木版刷りのさし絵、上部三分の一ぐらいが変体仮名らしい書体の説明文。さし絵主体の「浮世草子」（江戸時代に広く読まれた小説の一種）と見ていいだろう。二人がほぼ同時に「ああ」という声を出したのは、二人ともこの本について関心があった（知っていた）からと見いいてだろう。この「ああ」はせりふとしては採用されていない。

⑳㉑の会話の主体は画面に現れず声だけ。「おつり」は「釣銭」のていねい語だが、現在では「お」を省くことはほとんどないので一語として扱いた

い。それより「六百円のおつり」という言い方、つまり「の」の限定用法に慣れさせたい。特に「AのB」と「BのA」という言い方でAまたはBが数量詞の場合はむずかしいが、前項は後項の限定として覚えさせたい。「千円の本」と「本代の千円」など。

⑥⑦「ありがとうございました」の「た」については、⑤⑥と同様研究上も議論の多いところであるから、学習者の段階を考えれば深入りしないほうがいい。仮にテンスと考えたとしても、アスペクトやムードの体系と切り離しては扱えないからである。ここでは客に本を買ってもらったという行為が完了したことに対する感謝の言い方ぐらいにとどめておくべきだろう。客が本を店員に示して「これをください」と言った段階なら、店員は「ありがとうございます」と言うだろう。店側が代金を受け取り、本を引き渡す段階、およびそれ以後なら「ありがとうございました」と言うのがふつうだという程度におさえおいたほうが無難である。しかしこの説明もすべての場合に単純に応用することは危険である。類似の場面である人はル形を使い、ある人はタ形を使うように見えるのはムードが大きく関係しているからである。

⑥⑦の「お待ちどおさま」は④⑤と違い、待たせたことがよく分かるので、理解しやすいだろう。ただ、学習者によっては、親しい友人同士でも、この程度のことで、いちいちわび（または感謝）のあいさつをするのかという疑問は残るかもしれない。文化（習性）の違いと言っていいだろう。

⑥⑧の「さあ」は、次の行動を起こそうとする時に相手や自分に、（心の準備をさせるようなつもりで）言って聞かせることば。感動詞として扱われている。この文の「～から、～ましょう」は、③④⑤⑥で見た勧誘文。「本は」は、「本を」の主題化であるが、この文脈で、「本を」でもよいとするわけにはいかない。三人の登場人物には、本を買うこと、そのあとで桜を見に行くこと、という二つの目的があり、第一の目的「本を買うこと」が達せられたので「本は」と取り立てた（対比化）のである。「桜を見に行く」については、③④参照。

⑥⑨の「ええ」は山田の誘いに対する同意。

Ⅳ 桜並木で (⑦①～⑦③)

画面は一転し、突如、満開の桜がアップで映る。つづいて桜並木を歩く三人。いくぶん濁った堀の水を背景に花吹雪。桜と水とボートは絵はがきのように美しい。ここは、皇居の北西側に位置し、千鳥が澁公園と呼ばれる。都心の桜の名所の一つ。

日本における桜の種類は三十種類ぐらいで、都会に多いのはソメイヨシノ（染井吉野）だと言われる。桜は古来、文学、美術の好個の材料として愛され、花王と呼ばれ、国花とされた。木材はその材質が強固なところから多方面に利用される。「さくら」を一要素とする語構成（さくらもち、さくら草、など）は極めて多く、日本の風物の一面を代表している。

なお、東京の開花期は四月上旬。開花日から満開日まででは平均一週間。日本各地の桜の咲きはじめの同じ日を結んだ線を、天気図の前線になぞらえて「サクラ前線」と呼んでいる。種類によって違うが、染井吉野桜のサクラ前線は、例年三月末には九州に現れ、気温が昇るにつれて北上し、四月初めに本州中部、北海道に渡るのは五月初旬である。

Ⅳ—1 桜並木を歩きながら (⑦①～⑦⑥)

アップで映る桜の色は赤味が強く、遠景の桜が白っぽく見えるのは、桜の種類かもしれないし、距離のせいかもしれない。遠くから見ると一般に白く見える。三人は桜並木を歩いてくる。

順子「⑦①わあ、きれい。」

山田「⑦②すっかり春らしくなりましたね。」

正子「⑦③ええ。」

正子「⑦④あんなに桜が散って——。」

順子「⑦⑤まるで雪が降ってるようですね。」

正子「⑦⑥ほんとうに……。」

⑦①の「わあ」はおどろきを表わす感動詞。男女ともに使う。「わあ、きれ

い」が「ワ——↗, キレ——↘」と表記したいほど、通常の二倍以上の長さと思われるほど長く発音して、おどろき、感嘆の気持を強く表している。「きれいだ」の「だ」は他の形容動詞の場合も同様、女性にあっては特に落ちやすく、日本語の男女差の一つの特徴をなしている。終助詞「ね」「よ」が来る場合はその傾向が顕著である。

[31] (男) きれいだね／きれいだよ。

(女) きれいね／きれいよ。

しかし、「わ」「わよ」「こと」などが続く場合は「だ」が必要である。

⑫の「すっかり」は、ある状態が全体的に（完全に）行きわたっていると感じられる気持を表わす副詞。「春らしい」の「らしい」は、「男らしい（男）／学者らしい（学者）」の場合と同じように形容詞を作る接尾語とされ、ふつう助動詞の「らしい」（推定）と区別して扱われる。この派生形容詞の「Xらしい」は「X」と言えるだけの諸条件を十分に備えていると判断される様子を表す。「X」が名詞の場合は、この「らしい」が接尾語か助動詞か分かりにくいことが間々あるが、簡単な判別方法は「X（である）らしい」と「である」が入れられるか否かで判断がつく。「あそこに立っている人はどうも女（である）らしい」「女（である）らしい人影が見えた」（いずれも助動詞用法）など。ここではこれ以上触れない。3.3.1. 参照。

⑭の「あんなに桜が散って——」というせりふが言われている間は、まだ桜の散る光景は映っていない。何を（どこを）見ているのだろうかという疑問が湧くかもしれない。しかしすぐあとに花びらがはげしく舞い落ちる様子が見え、同時に次の⑮の文が言われている。「あんな（に）」は「あのよう（に）」の口語表現であり、「こんな（に）」「そんな（に）」「どんな（に）」の系列の一つ。「こんな／そんな／あんな／どんな」は連体詞として扱われており、「に」がついて副詞としてはたらく。この副詞のあとには形容詞や副詞がくることが多い。ここでは、「あんなに（たくさん／はげしく／……）桜（の花）が散って」の意。「あんなに」とア系を使っているのは、⑯の「あっち」、⑰の「あの店」などと同じく、話者の一団（三人が同一領域）から

ある程度以上離れているものを指すからで、三人のすぐ目の前で桜が散っているとすれば「こんなに」となる。「桜が散って」の「桜が」は「桜の花が」の意。「散って」は「て」を使った動詞の中止用法ではあるが、この「て」は「ほら、桜が散ってよ」のようにむしろ終助詞の用法に近く、一種の断定である。したがって、このあとに何か省略されていると考えるより、これ自身で完結した表現であると考えたほうがよい。むろん、何かの表現を復元することは可能だが、話者の意識と離れてしまう恐れがある。

[32] あんなに桜が散って、？きれいですね／？残念ですね／？早いものですね／？どうしてでしょう／……

のようにその場に依じていくらでも考えることはできるが、話者の本当の意図は話者自身によって飲み込まれてしまっており、その理由となることだけを述べる表現である。「散る」は一緒にあったものが離れ離れになるのが原義。上から下への移動を表わす「落ちる」とは異なる。

㊦の「まるで」は、あらゆる点からみてそう言ってさしつかえないの意味をもつ副詞。この文のように「まるで～(の) ようだ／です」の形で覚えさせたい。と言って、「まるで」と「ようだ」が常に共起するというわけではない。「ようだ」はいわゆる比況(または様態)を表す助動詞で、意味・用法はかなり複雑であるが、この文に限って言えば、ある事柄(この場面では桜が散る様子)がそれに似ている別の何かを想起させるという話し手の判断を示す。

[33] (まるで) 本物のようだ／綿のような雲／兄弟ようによく似ている／はずかしいような気持／足が棒のようだ(㊦)／……

これについては3.3.2.参照。なお、助動詞「ようだ」と「らしい」の差異はよく問題になるが、この映画では助動詞としての「らしい」は取り上げられていないので、質問がない限り、触れないほうがいいだろう。この二語の差異については、この基礎篇の「さくらがきれいだそうです」の映画で取り上っているので、その解説を参照のこと。「ようだ」の類義語として「みだいだ」があるが、これは一層口語的表現である。

⑦「ほんとうに」は副詞（「ほんとう（本当）」は名詞）。前の文⑤の「～ようですね」に答えたもの。「（ことばの真実の意味において）あなたの言うとおりの意。前の文を受けて副詞一語で答えることは珍しくない。なお、「ホントニ」と短く発音されることが多いことも、話しことばの指導としては大切だろう。

Ⅳ-2 ベンチに座って (⑦⑦～⑧③)

桜並木の下を歩きながら、ベンチのあるところへ来る。

山田「⑦⑦座りませんか。」

二人「⑦⑧ええ。」

順子「⑦⑨ずいぶん歩いたので、疲れました。」

正子「⑦⑩ええ、私も。」

正子「⑦⑪歩きすぎて、足が棒のようです。」

山田「⑦⑫いやあ、どうもすみません。」

⑦⑬今日は、いろいろありがとう。」

⑦⑭の「座りませんか」は、この場合、「掛けませんか」でもよい。「座る」と「掛ける」は本来意味が異なり、「座る」はひざを折りまげ腰をおろして席につくことで、ここから「いすに（腰を）掛ける」ことも「あぐらをかく」ことも含まれるようになったもの。正座だけを「座る」と覚えている学習者には訂正してやる必要がある。反対語は「立つ」。

⑦⑮の「～ので、～ました」は客観的な因果関係の描写。ただし、「から」でもよい。ただ、「から」を使うと表現上の〈かしこまり〉の度合（緊張度）は低くなり、〈くだけ〉が大きくなる。

⑦⑯の「私も」の「も」がかなり高く発音されていることに注意。「同様に疲れた」ということを強調するため。

⑦⑰の「歩きすぎて」の「(連用形+) すぎる」は複合動詞を構成する後要素(接尾語的用法)。動詞ばかりでなく、形容詞・形容動詞の語幹にもつき(あつすぎる、静かすぎる、など)、ふつうの水準を越すことを表す。「歩きす

ぎて、足が棒のようです」の「て」という接続助詞の機能は極めて複雑なものであり、構文上の意味、用法はいまだ十分に説明されてはいない。この㊸の文の「て」に相当する使い方は、しばしば原因・理由を表わすものとして、初級の教科書にも取り上げられることが多いが（たとえば、食べすぎて、お腹をこわしました／暗くて、見えません／かなしくて、泣きました／……）、「から」「ので」と違い、「て」自体に原因・理由を表す意味があるわけではなく、前件と後件の意味上の結びつきからそのような意味があるように見えるだけである。したがって、文語的になることをいとわなければ、「～を食べすぎ、お腹をこわした」のように「て」を使わなくても同じ意味を表すことができる。この「て」によって結ばれた前後関係が意味上の因果関係を表すのは、その因果関係が社会通念として無理なく認められる範囲の事柄に限られる。その場合は多く「から」や「ので」に置きかえられる。

- [34] a かぜをひく・学校を休む→かぜをひいて、学校を休む。
b (問題が) むずかしい・分からない→むずかしくて、分からない。
c (値段が) 高い・買えない→高くして、買えない。

しかし、次のような「て」が不可能なことについては、十分に説明されていない。

- [35] (値段が) 安い・買いたい→*安くして、買いたい。

「足が棒のようです」の「ようだ／です」については、㊸の「まるで雪が降っているようです」ですでに述べた。なお、正子は「足が棒のようだ」と言って、足をさすり、正子・順子が二人して「ウフフ」と笑うが、学習者はこんなところに関心を示すかもしれない。この笑いは「足が棒のようだ」という表現のユーモア性によるものよりも、この表現の大げさすぎることに對する反省（山田への心づかい）のようにも見える。ジャパニーズ・スマイルと呼ばれる、困った時や恥ずかしい時などに出る笑いは、一般に、照れかくしと言われるが、＜私の状態にあなたは責任を持つ（あるいは同情する）必要はない＞という心づかいの非言語的表現と解釈することもできる。

㊸の「いやあ」は、否定の「いや」の長くなったものではなく、困った時、恥ずかしい時、おどろいた時、わびる時、うれしい時、謙虚の気持を表わしたい時、などに思わず口をついて出る感動詞。「それは、それは」などに近い。「いやあ」の「い」の発音は学習者には聞きとりにくいことがあり。「やあ」(㊸)と混同する恐れがあるので注意。「どうもすみません」(「どうも」については㊴㊵、「すみません」については㊸参照)のイントネーションが上昇調で言われているのは、わびる気持を明瞭に出すため。

㊹の「今日は」は、感謝の対象となる行為が行われた<時>を取り立てる言い方。「きのうは/先日は/この前は/……」など。感謝の対象となる事柄(名詞句)については、㊴でも触れたが、<~を>格。「りんごを/贈り物を/ご注意を/……」など。感謝の対象となる行為・動作については<~てくださって/~てくれて/~ていただいて/~てもらって>などの形。「送ってください/教えていただいて/……」など。「いろいろ」は感謝すべき対象となる行為がいくつかある場合に、それらをひっくるめて言う言い方であるから、<時>の場合に使うのがふつう。<~を>や<~て>の場合は、感謝の対象となる物や行為を特定しているので「いろいろ」は不要となる。もちろん「~たり~たりしてくださって」のような場合は「いろいろ」も現われうる。「~は、~を」「~は、~て」の形を取ることも多い。

[36] a きのうは、おいしいりんごをありがとう。

b きのうは、おいしいりんごを送ってくださってありがとうございました。

「いろいろ」が話し手と聞き手の間の了解事項について使われるように、「~て」で表わされる行為を省略して「きのうは、わざわざありがとう」のように言われることもある。この㊹の「いろいろありがとう」が「いろいろありがとうございました」と特にていねいに言えば、三人のこれまでのことばづかいからみて、ていねいすぎる感じを与えるだろう。これが女性だったら、それほどていねいすぎると感じることもないかもしれない。いつ、どの程度か、これは敬語についてのくわしい解説がなくては無理である。

せりふは以上で終わりになる。土手の桜並木の下を花見の人たちが歩いている。赤いボンボリ（雪洞）が三つほど見える。学習者が興味を示せば、桜について、花見について、あるいはボンボリについて、日本人や日本文化との関わりを説明するのでもいいだろう。少なくとも、そうしたことについてある程度の準備をして教室に臨みたいものである。

3. この映画の学習項目の整理

3.1. 「から」と「ので」

すでに2.1.で少しく触れたが、「から」「ので」の学習は、本格的なく複文>の学習の入門事項の性格を持っている。複文のむずかしさは、条件法（「たら／なら／ば／と」など。映画「あそこへのぼれば うみがみえます」参照）の学習段階で一層明らかになるが、文を構成する各要素の間の関係が複雑になり、構文上、意味上の整合性が極めて微妙になるからである。教授上明確な説明ができない場合がしばしばあるが、初級段階ではあまりデリケートな問題に触れるのは好ましくない。以下、この映画での基本的な学習事項について述べる。

3.1.1. 「から」と「ので」が承ける形

従属文と主文を結ぶ意味上の制約はあとで見ることにして、まず「から」「ので」が承ける形（従属文の文末形）はどうなっているか見ておく。

| | | | | | |
|--------------|---|--------|---------------------------------|---|-----|
| (1) 学生だ（静かだ） | } | +から | (1)' 学生 <u>な</u> （静か <u>な</u> ） | } | +ので |
| 学生だった | | | 学生だった | | |
| 学生ではない | | | 学生ではない | | |
| 学生ではなかった | | | 学生ではなかった | | |
| (2) さむい | } | +から／ので | さむかった | } | |
| さむくない | | | さむくなかった | | |
| さむくなく | | | | | |
| さむくなかった | | | | | |

- | | | |
|--------------|---|-----------------------|
| (3) 食べる | } | +から/ので |
| 食べた | | |
| 食べない | | |
| 食べなかった | | |
| (4) 食べる | } | (+「から/ので」は不可能) |
| 食べなさい | | |
| (5) 食べよう | | |
| (6) 食べるまい+から | | (「ので」は不可能) |
| 食べるだろう+から | | (「ので」は不可能) |
| 食べるらしい+から | | (「ので」はまれ) |
| 食べるようだ+から | | (「 <u>よう</u> な」+「ので」) |

以上は文末形式の一例であるが、これらから、次のことに留意しておきたい。

- a) 「ので」が名詞文・形容動詞文（同じ型の助動詞をふくむ）を承ける場合は、「～だ」が「～な」に変わる。
- b) 文末が命令形・意志（志向）形の場合は、「から」も「ので」も接続しない。
- c) 「だろう」「らしい」という推量を表わす助動詞がくると「から」は接続するが、「ので」はふつう接続しない。

これらの特徴を示す理由の一つは「ので」が「の（準体助詞）+で」の性格を残していて、いわゆる連体形を承げるからである。命令形、志向形は、それ自身で話し手の意図を完結するのが本務——つまりムード性の強い要素——であるから、修飾的な機能は持っていない。形態上で特に注意しておきたいのは上記 a) の場合である。学習者は「から」「ので」の意味の類似性に引きずられて、語形変化に注意が向かないことが多い。助動詞「だ」や形容動詞の変化（活用）は、学習者が大いに苦手とするところである。

実際の文末形は、補助動詞（「～ている」など）や助動詞（「～たい」など）、その他がついて複雑であるが、原則的に上記に従う。また、上記(1)～

(6)の形は「ふつう体」で示してあるが、「ていねい体」(です, ます体)になっても、その接続の可能性は同じことである。

さらに注意しておきたいことは、<文>が「ふつう体」(主文の文末形で示される)の時は、「から」「ので」が承ける従属文の形も「ふつう体」であるが、<文>が「ていねい体」の時は、「から」「ので」が承ける従属文の形は、「ていねい体」の時もあるし、「ふつう体」の時もあるということである。しかし、これはどちらでもよいということではなく、主文が「ていねい体」であれば、「から」の前は「ていねい体」になりやすく、「ので」の前は「ふつう体」になりやすいという一般的傾向がある。

この映画でも、「から」「ので」を含む文は全部で17例あり、そのすべてが主文に「です/ます体形式」を取る文であるが、「から」の文10例のうち7例が従属文に「ふつう体」を取り、3例が「ていねい体」を取っている。一方、「ので」の文7例はそのすべてが従属文に「ふつう体」を取っている。

「から」「ので」の前の形は、「ふつう体」がよいか「ていねい体」がよいかということは一概には言えない。学習者がこれまで文末を「です・ますとその変化形」で終わらせることに慣れているとすれば、<ていねい体+から/ので>でよいとするのも便宜上ゆるされようが、現実の日本語から離れる恐れがある。

このことについて、早く三尾砂(1942)は主文が「ていねい体」である時の「から」「ので」やその他の接続助詞が承ける形を統計的に調査して、次のような「ていねい化百分率」を示した。

| 接続助詞 | が | けれど | もんで すから | から | し | ので | のに | と | (=たら) |
|------|------|-----|------------|----|----|----|----|-----|-------|
| % | 94.5 | 86 | 76 | 73 | 58 | 28 | 20 | 7.3 | 6 |

つまり、主文が「ていねい体」であれば、「から」が承ける従属文の形は、73%が「ていねい体」であり、「ので」の場合は28%にすぎない。この百分

率を応用すれば指導の技術として「から」の前は<ていねい体が望ましい>という概念規定を与えてもおかしくないし、「ので」の前は<ふつう体でもよい>と言ってよさそうである。ただ、上表のパーセントは、戦前の戯曲集など書かれた資料に基づいた調査であることは注意しておいたほうがいい。日常の会話では、もの言いをしていねいにしようという意識が強くなると「～ますので／～ませんので」は、もちろん「～ませんでしたので」という用法も十分ありうることである。

3.1.2. 「～てから」と「～たから」の混同

すでにせりふ^{③③}の解説で触れたので、ここでは簡単にするが、次の文を比べてみていただきたい。

③③ 「神田へ行ってから、桜を見に行きましょうよ。」

③③' 「神田へ（は）行ったから、桜を見に行きましょうよ。」

学習者はこの映画が「から」を主題をしているのをに気を取られて「～てから」を「～たから」と聞きがちがえたり（その逆もある）、同一視したりしていることがある。特に、③③で触れたが、事象としての時間的前後関係に基づいて、それを因果関係をして表現する場合は、その意味上の微妙な差が「te」「ta」という変形上の微妙な差とあいまって、区別を一層むずかしいものにする傾向がある。なお、この場合、否定形「なかったから」はありえても「なくてから」はありえないことも同時に触れたほうが語形認識にとって有効である。

3.1.3. 「から」を接続詞として使う誤用

「から」の学習の初期に、学習者はしばしば次のような誤用をすることがある。

[37] 私は日本へ来たばかりです。から、まだ日本語がへたです。

[38] 雨が降りました。から、家にいました。

これは、「～です／ますから、～」という接続助詞の使い方と「～です／ます。ですから、～」という接続詞との区別が混乱としていることを示す。「です」をいう要素の同音反復が引き起こした一種の類推的誤用であるが、

指導者側の発音や表記についての不注意もこうした誤用を犯させる大きな原因である。特に「から」に注目させたいばかりに、そこにプロミネンスを置いたような発音をすることは注意を要する。誤用は教授者側に責任のあることもよくある。

3.1.4. 「ので」と＜「のだ」の変化形＞としての「ので」

原因・理由を表わす「から」「ので」は前にくる文（従属文）を承けるが、すべての文末形式を承けうるものでないことはすでに触れた。この映画によく出てくる「～のだ/のです」の場合も、「から」を従えることはできるが、「ので」には続かない。せりふ⑤⑥を利用すれば、次のようになる。

⑤' せっかく来たのだ $\left\{ \begin{array}{l} \text{○から} \\ \text{×ので} \end{array} \right\}$, もう少しさがしてみませんか。

これは「せっかく来たのだ。だから、もう少し……」と言いかえられる。文末にくる「のだ/のです」は一種の助動詞としてムード性の強い＜説明的判断＞を表わしていることは、本文の解説で述べたが、これの連用中止形の「ので」と接続助詞の「ので」とは同じ形なので、形態的な取り扱いについても、意味上も、むずかしい問題をはらんでいる。この二種の「ので」を区別することは必ずしも容易ではない。

[39] 私は日本へ勉強に来たので, 見物に来たのでではありません。
は、「のだ」が基になっている文であり、並列関係を表わしている。したがって、「から」で置きかえることはできない。初めの「ので」は「のであって」とも言える。このような「の」は3.2.で述べる名詞化辞（準体助詞）とするのが一般的であるが、接続助詞「ので」の「の」はもはや名詞化辞とは性格の異なったものとする論者も多い。

二種の「ので」を区別するには、上記 [39] の文を少し変えて、因果関係の文、

[40] 私は日本へ来たので, できるだけたくさん見物しようと思います。
にしてみると、この文の「ので」は「から」と言えないことはない。一方 [39] の場合のように「のであって」とすることはできない。

って、またどんな従属節と主節とをつなぐかによって違って来たらうと述べている。

| Q文の ムード | | 事 実 の 描 写 | 判 断 ・ 断 定 | 判 断 ・ 推 量 | 意 志 ・ 意 向 | 勧 誘 | 命 令 | 疑 問 |
|------------------------|------|-----------------------|-----------------------|-----------------------|-----------------------|--------|--------|--------|
| つな ぎ の 形 式 | | | | | | | | |
| ～ | テ | ○ | △ | △ | × | × | × | × |
| カ | ラ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | △ |
| ノ | デ | ○ | ○ | ○ | ○ | △ | △ | △ |
| タ | メニ | ○ | ○ | △ | × | × | × | △ |
| オ | カゲデ | ○ | ○ | × | × | × | × | × |
| セ | イデ | ○ | ○ | × | × | × | × | × |
| バ | カリニ | ○ | ○ | × | × | × | × | × |
| カ | ラニハ | × | ○ | ○ | ○ | × | × | × |
| 以 | 上(ハ) | × | ○ | ○ | ○ | × | × | × |
| モノ | ダカラ | △ | ? | × | × | × | × | × |

この表からも、「から」「ので」が初級の教科書に取り上げられる理由が分かるだろう。

この映画で扱われている「から」と「ので」を含む文を、主節の形式とムードによってまとめれば次のようになる。

- 「から」 (1) 「～から、～ましょう(よ)」③⑬⑳㉔ [意志・意向] [勧誘]
 (2) 「～から、～ませんか」⑤⑦ [勧誘]
 (3) 「～から、～ください」③⑤⑦⑧ [命令]
 (4) 「～からです」⑪④ [判断・断定]
- 「ので」 (1) 「～ので、～ました(ね)」⑫⑳㉔ [事実の描写]
 (2) 「～ので、～ます」③⑥④⑤⑥ [意志・意向]
 (3) 「～ので、～んです」⑦ [判断・断定]

上記の〔 〕内の分類は、その文の発話意図から判定したもので、「～ます」や「～ましょう」「～ませんか」というような形自体から簡単に決められるものではない。この分類から、この映画では、「から」が「意志」「勧

誘」「命令」「断定」の四種の文に、「ので」が「描写」「意志」「断定」の三種の文に限って提出されていることが分かる。「意志」と「断定」、「断定」と「事実の描写」は分けにくいという性格を考えれば、「から」と「ので」が使い分けられる特徴的な文の性格は「勧誘文」か「命令文」ということである。事実、この二種の文に適合するのは「から」であって、「ので」を使うと不自然になることが多い。

⑩ 山田さんが待っている $\left\{ \begin{array}{l} \text{から} \\ \times \text{ので} \end{array} \right\}$, 早く行きましょうよ。

⑪ ……ここで待っています $\left\{ \begin{array}{l} \text{から} \\ \times \text{ので} \end{array} \right\}$, 早く行ってきてください。

この映画では提出されていないが、「推量文」や「疑問文」とは次のようなものである。

[44] この本はむずかしい $\left\{ \begin{array}{l} \text{から} \\ \text{ので} \end{array} \right\}$, 子供には無理でしょう。

[45] きのうは雨が降った $\left\{ \begin{array}{l} ? \text{から} \\ ? \text{ので} \end{array} \right\}$, どこへも行きませんでしたか。

純粋な「疑問文」に「から」「ので」がなじまないのは、意味上の理由による。したがって、文末をたとえば「～のですか／のでしょうか」というような疑問判断や疑問推量に移行させれば可能な用法となる。

ここで、上記永野賢氏の論文(1952)の要点を紹介しておく。(用例は一つにとどめる)

1. 「から」の文(「ので」で置きかえられない文)

1) 推量(想像・推測)

○あいつの事だから、少しは持って帰るだろう。

2) 見解(意見・主張)

○黒船之儀は商売のことであるから、年月を経て貿易に来べきである。

3) 志意(意向・決心)

○そんなの困りますからむろんあたし、名前は変えて頂きますわ。

4) 命令（禁止）

○危いから、もっと、あっちへ行ってなさい。

5) 依頼（懇願・勧誘）

○よく判りましたから、もうなんにも仰有らないで。

6) 質問

○しかし増井さんは帰られてもいつもは一人だからそんな必要を感じないでしょう。

以上のすべてに共通した性格は、話し手の「主観」に基づく表現である。聞き手に伝え納得し理解してもらうためには、それ相応の根拠や理由を示すことが必要になる。これらの「から」が「ので」に置きかえられないのは、「ので」に主観的な理由を表わす機能がなからである。

2. 「から」だけにある用法

「～からだ／からである」という言い方がそれであり、「結果や帰結を先に述べて、原因・根拠・理由などをあとから説明的に述べる」ものである。

「AだからBである」をひっくりかえして「Bである。なぜならばAだからだ」と言うことができるのは、この場合Bが主題であって、Aはその解説だからである。BとAとは相互に独立性が強く、本来別々の二つのものであって、それを話し手が自らの主観の責任において結びつけているのである。

「ので」にはこの用法がない。「～ので。」と文が終ることがあるが、これは形式的な倒置にすぎない。

3. 「から」の終助詞的な用法（「ので」にはない）

○すぐ持って行きますから……。

○その翌日、ここにいたら危いからとみんなまた荷作りをはじめました。

これは、理由だけを述べて、その帰結を言外に暗示するか、または、その帰結に基づく行動の描写に直結させる言い方であって、ただのしり切れではない。このことから、「から」によって持ち出される条件は、条件としての独立性が強く、主観的な理由の説明として使われることが分かる。

4. 「から」はいくつかの係助詞や「といて」などと結びつく（「ので」にはない）

「～からは」「～からには」「～からこそ」「～からとて」「～からって」「～からといて」などがそれである。これは、「特に理由を提示して、課題の場を設定する」用法である。すなわち、何かの理由となるような事がらを提示して、その次にくる陳述を強く期待させるような場を構えるわけである。

5. 「ので」の用法の特徴

「ので」のあとにくる文は、少数の例外はあるが、ほとんど事がらの「客観的叙述」である。

1) 自然現象・物理的現象などの記述

○山に近いので昼間はひどく暑いが、……

2) 社会事象の記述

○ドイツの実例ではこの最低水準が炭坑夫に保証されなかったので出炭高が低下した。

3) 生理的現象の描写

○あんまり働いたので私はとうとう病気になってしまい、畑にも出ることができなくなりました。

4) 心の動き（感情・感覚を含む）の客観描写

○あんなに元気だった正広君が、車からおりた途端に急におとなしくなってしまうので、僕はオヤッと思った。

5) 行動の客観描写

○夜が明けたので私は船べりの方に寄って昨日いた家を見ました。

6) 事物の様子描写

○快晴に恵まれたので下界をよく見下ろすことが出来た。

これらの「ので」を「から」に置きかえると、大部分がきわめて不自然な言い方になるか、または、しっくりしない感じのものになる。「から」に変わって末尾に「のだ」をつけるとしっくりするものもある(たとえば、2の例)。また「ので」とも「から」とも言えるものもある。

これらの例はすべて、主観を越えた現象や事がらを叙述したものであり、事象をありのままに客観的に描写したものである。ここには話し手の主観を超越した因果関係が存在し、前後の二つの事がらは判断や推論という主観的な営みによって結びつけられるものではなく、本来、全体として一つのものである。

6. 「ので」は、推量や未来の意味のことばにつくことができない。(用例略)

「～でしょう／だろう／であろうから」とは言えるが、この「から」を「ので」にすることはできない。この事言は、「将来のことは、判断や推論の根拠とすることはできても、まだ事実として存在するわけではない」からである。

7. 「から」は、「～のだから／のですから」と言えるが、「～のなので／のですので」とは言えない。

これは「のだ／のです」が判断・主張を表す言い方であるとする、と、「～のだから／のですから」という形は、いったん判断を下し、それを根拠として推論することを表すからである。事実や現象をありのままに描写する「ので」が、主観的な判断を表す「のだ／のです」と続かないのは当然である。

8. 「から」と「ので」のニュアンスの相違

1) 次の二つの文を比べてみる。

○墨で書いてあるから、なかなか消えない。

○墨で書いてあるので、なかなか消えない。

「から」の文は「なかなか消えない。それは墨で書いてあるからだ」という判断に基づいて、意見を述べ、見解を表明している。だから、誇張すれば「～なかなか消えないヨ／ノダヨ」などの響きを持っている。これに対して「ので」の文は「墨で書いてあるために容易に消えない」という全体を、自明の一事実として叙述していると言える。

2) 「ものだから／ものですから」という言い方があるが、「ものだ／ものです」という客観視的描写の形をとっているために、「ので」の意味に非

常に近いものになっているが、「から」を含んでいるだけ、「ので」より主観性が強く、また「もの」を含んでいるだけ「から」よりやわらかく感じられる。これは東京の話しことばで非常に多く用いられるが、それは「ので」と「から」との中間的な表現に便利だからであろう。たとえば、

○あんなおはがきでしたものですから、昔の知り合いかと思いました。

3) 「から」は独立の接続詞に言いかえると、ほぼ「だから」に、「ので」は「それで」に当たる。

4) ていねい形の依頼表現や意向表現があとにくる場合、「から」とあるべきところに「ので」の使われることが非常に多い。

○二月十二日より二月二十八日迄次の通り電力制限が実施されることになりましたのでお知らせ致します。

このような場合「から」を使うと、主観的な理由を押しつけ、根拠を強調し、言わばたみかけるような印象を相手に与えるのに対して、客観的表現である「ので」を使うと、自分を殺して主張を押しつけない、淡々と述べている、という印象を与える。すなわち、「から」だと、強すぎてかどが立つところを「ので」を使うと、ていねいな、やわらかい表現になり、次にくるていねい形の表現とよく照応する。

以上で永野論文の紹介を終える。詳しくは原論文を見ていただきたいが、ただ、一つ注意しておきたいことは、「から」は主観的で、「ので」は客観的であるということがこの論文の基調になっているが、これをあまり強調することは、学習者の主観的判断で因果関係を作り上げる危険もあるということである。また、最後の4)のていねい表現と「から/ので」の関係は重要であると思われる。この映画に採用されている「ので」の文のほとんどすべてが、多少のぎこちなさをいとわなければ、「から」に置きかえられるのは、この4)の性格に由来すると考えていいだろう。友人同志の会話ではあるけれども、です・ます調を基盤としているところから、「から」を使うとていねい度と合いにくいということは言えるわけである。もっと<くだけた>会話

に直してみると、それがよく分かるだろう。

なお、「から」と「ので」の違いについては参考文献の鈴木忍(1978), S. Martin (1954, 1975), A. Alfonso(1966)なども参照されたい。

特に S. Martin (1954) は<「から」と「ので」は、多くの場合、交替するが、わずかながら意味の違いがある。「ので」は理由 (reason) を強調し、「から」は結果 (result) を強調する>と述べ、次のような例をあげ、英訳に特徴を出している。

去年山へ行ったから、泳ぐことができませんでした。

“Last year I went to the mountain, SO I COULDN'T SWIM.”

去年山へ行ったので、泳ぐことができませんでした。

“Last year I couldn't swim, BECAUSE I WENT TO THE MOUNTAINS.”

これは永野氏の「B (後件) がテーマで、A (前件) がその解説である」という説明と相照応し、示唆に富んでいる。初級段階では有効であろうと思われる。

3.2. 名詞化辞としての「の」

「の」という小辞は、それ自体多様な意味・用法を持っていることは周知のとおりだが、ここでは、この映画に出てくる、句・節を名詞化する機能についてだけ取り上げる。国文法では「準体助詞」または「形式名詞」として扱われているものの一側面である。この映画では用例として、

⑥ 疲れたので、もう本をさがすのは、やめます。

という文がある。「本をさがす」という動詞句 (節) を名詞化した用法である。句・節を名詞化する要素には一般に形式名詞とされている「こと」もある。ある文の中で「の」か「こと」かという問題は構文上のむずかしい問題なので、ここではほとんど触れる余裕はない。なお、次のような代名詞的用法の「の」とは区別される。

[46] 君が買ったのは、どれですか。

すでに、3.1.1.で「から」「ので」が前にくるどんな形を承けうるかという
ことについて述べたが、「の」が名詞化する前要素も「から」「ので」
の場合とほとんど同じである。すなわち、動詞・形容詞の連体形（ル形・タ
形）には自由につくが、動詞の命令形や助動詞の「(よ)う」「まい」などには
つかない。ていねい形「です」や「ます」のあとにもある程度来にくくなるが、
これは文全体のていねいさと関係していることで一概には言えない。

「の」が前要素を名詞句（節）化するということは、そのあとに格助詞が
来うるということである。

| | | |
|--------------------|---|--------------|
| 「47」本をさがす <u>の</u> | } | が（いやになった） |
| | | を（やめます） |
| | | に（疲れた） |
| | | から（自由になりたい） |
| | | と（いっしょに……） |
| | | より（惜りるほうが……） |

さらに、複合格助詞と呼んでいい「に対して／を指して／を指して／を
もって」などや、係助詞や副助詞（取り立ての助詞）の多く（「は／も／こ
そ／さえ／だって／って／だけ／くらい／……」）が来うる。つまり句・節
全体を一個の名詞と見立てたのと同じ扱いになる。

ここで問題になるのは、「の」によって名詞化された句・節に「だ」がつ
くと＜名詞＋だ＞と同じ形「のだ」となるので、その連用形「ので」と接続
助詞「ので」との異同である。これについては3.1.4.ですでに触れたので略
すが、学習者には別のものとして扱うほうが混乱が少ないだろうと思われ
る。

この「の」の練習としては、

- 1) 私は絵が好きです→私は絵を見るのが好きです。
→私は絵をかくのが好きです。
- 2) 絵を見るのと、かくのと、どちらが好きですか→見るのは好きで
すが、かくのはあまり好きではありません。

3) 本を買いましたか→買ったのは本です。

その他の練習が行われる。

この「の」を扱い、文が複雑になると（連体修飾節になると）、どうしても「こと」との使いわけが問題になってくる。シンタクス上のどのような制約で「の」と「こと」が使い分けられるかは、残念ながら、あまり解明されていない。連体修飾に関する種々の研究論文を参考にするしかない。

この映画では「こと」は取り上げられていないが、L. Joseph (1976) の説を簡単に紹介して、初級段階の学習者の便に供することにする。文末の動詞を中心としている。用例は一つにとどめる。

1. 「の」しか使えないもの。

1) 「見る・聞く・おどろく・感じる・まいる……」など、sense perception の動詞。

○彼がビールを十本も飲んだの／×ことにはおどろいた。

2) 「見つける・つかまえる・手伝う・助ける・止める・制止する……」など、discovery, helping, stopping を表わす動詞。

○ぼくは母が皿を洗うの／×ことを手伝ってあげた。

2. 「こと」しか使えないもの。

1) 「要求する・強制する・命ずる・頼む……」など、ordering, request を表わす動詞。

○私は次郎によく働くこと／×のを命じた。

2) 「提案する・勧める」など、proposal, advice を表わす動詞。

○私は彼にそのクラブにはいること／×のを勧めた。

3) 「推定する・考える」など、deduction, thinking を表わす動詞。

○お月さんにロケットが着いたこと／×のを考えてごらん。

4) 「習う・学ぶ」など、learning を表わす動詞。

○子どもたちはコロンブスがアメリカ大陸を発見したこと／×のを学んだ。

5) 「できる」など、skill を表わす動詞。

○次郎は中国語を話すこと／×のができる。

3. 「の」「こと」両方使えるもの。

1) 「防ぐ・防止する・じゃまする」など， prevention を表す動詞。

○犯罪が将来おこるの／ことを防止しなければなりません。

Joseph の出した例はいずれも動詞文の例ばかりであり，名詞文は次の一例しかあげられていない。

○人間が羽のない二本足の動物であること／×のは周知の事実です。

名詞文には「こと」だけしか使えないわけではない。いずれにしても「の」と「こと」の使い分けについては名詞文と動詞文とを分けて考える必要がある。また、「～という（の／こと）」が必要か否かという問題もからんでくるだろう。寺村秀夫氏（1981）は，名詞節が補語（が格補語・を格補語・に格補語，など）になっているか，題目語（「～は」）になっているかに注目している。

3.3. 「らしい」と「ようだ」

この映画の場面Ⅳ-1に次のようなせりふがある。

㉔ すっかり春らしくなりましたね。

㉕ まるで雪が降っているようです。

これらの文の解説で述べたが，「春らしく」の「らしい」は形容詞を作る接尾辞として扱われるのがふつうで，推定の助動詞「らしい」とは区別される。助動詞の「らしい」はこの映画には出てこない。一方，「降っているようです」の「ようです／ようだ」は，比況を表す助動詞で，形容動詞型の語形変化をするものとして扱われている。「ようだ」は推定・類似の意味を表す場合もあり，「らしい」（推定）や「そうだ」（様態）と比べられることが多い。この問題については，「さくらがきれいだそうです」の解説書を参照してほしい。ここでは，この映画の用法に限って述べる。

3.3.1. 接尾辞「らしい」

「春らしい」は，「名詞+らしい」の形を持つ「男らしい(男)」「女らし

い(女)」「子どもらしい(態度)」などと同じで、この名詞の部分は任意に造語される傾向が強い。たとえば「スポーツマンらしい(活発さ)」「あなたらしい(考え方)」「都会らしい(都会)」など。なお、名詞ばかりでなく、形容詞・形容動詞の語幹や副詞のあとにもつく。「かわいらしい/子供らしい/わざとらしい」など。「～たらしい」という形もある。「長たらしい/自慢たらしい」など。一方、「みすばらしい/いじらしい/ほこらしい」などは現代では分析的には扱われないのがふつうである。

「名詞+らしい」の形を持つ形容詞の意味については、『日本語教育辞典』では次のように説明されている。「客体を外から観察して、感覚に訴える印象が、その前項成分の持つ意味内容と表面的に合致すると考えられる状態に用いられる。〈～としての特徴をたくさん持っている〉の意。また〈～という気持ちを起こさせる〉の意。(中村米男)」

これは次のようにパラフレーズできる。「(今は)春らしい」を例とすれば、

1. 今は春である。
2. 春は春特有の雰囲気(気温・景色・社会事象など)を持っているはずである。
3. そして、今は春特有の雰囲気を持っている。

これを、参考のために「(今日は)春のようだ」と比べてみる。

1. 今日は(春ではない)冬に属している。
2. 冬は春特有の雰囲気を持っているはずがない。
3. けれども、今日は春特有の雰囲気を持っている。

3.3.2. 「ようだ」が「比況」を表す場合

「ようだ/ようです」は「推定」の助動詞とも「比況」の助動詞とも呼ばれ、この二つの意味を区別することが多いが、区別しない場合もある。㊿の「まるで雪が降っているようです」は、ある様子が他の様子に比べられるという意味で使われているので、「比況」に属すると言える。『日本語教育事典』では次のように説かれている(倉持保男氏執筆)。

1) 様子や状態を何かにととえる意を表す。つまり、「～に似ている」の意を表す。

○4月なのに、夏のような暑さだ。

○まるで石のように固いパンだ。

○よほど疲れたらしく、死んだように眠っている。

これらの用法の中には、比喩として形式の固定しているものも多い。「蚊の鳴くような声」「雪のように白い」「芋を洗うような混雑」など。

2) 条件に合うものとして具体的に例示する。

○サッカーやラグビーのような激しい運動が好きだ。

○北海道のように寒い地方では、春と夏が一緒にやってくる。

○あなたのような意地の悪い人は大きらいです。(例示の事柄自体に言及)

○人に笑われるようなへまはしない積もりだ。(例示の形を用いた事柄の強調)

○このごろは毎日のように夕立が降る。(前の例と同じ。「夕立が非常に多い」こと)

以上のうちで「比況らしい比況」と呼べるものは、1)であり、㊸の場合と同じように、「まるで～(の)ようだ」という使い方がぴったりするのは、ほぼ、この1)に限られると言っていいだろう。

3.4. 非存在を表す「ない」

「ない」という否定的の意味を持っていることばが、品詞分類上何に属するかというような問題は、論者により見解が異なるのでここでは触れない。指導上重要なのは、「行かない」「寒くない」「金がない」などの「ない」が文論上どのくらい独立性があるか、ということである。

行かない?—×うん、ない。

寒くない?—×うん、ない。

などとは言えないのに対して、

金がない？——うん、ない。

とごく自然に言えるというだけで十分であろう。多少つけ加えれば、「寒くはない」「本でもない」などと副助詞を介入させることが可能な場合があるというぐらいである。「金がない」の「ない」は、多くの形容詞と同じく、独立して使えるので、一般に「形容詞」として扱われている。この映画に出てくる「ない」の例は次のようなものである。

③⑥ わたしも、さっき掲示板を見る暇がなかったので、ちょっと見てきます。

④② あら、本はなかったんですか。

④④ この店にはないので、他へ行ってさがします。

④⑨ ないですね。

⑤③ どうして、ないのでしょうかね。

いずれも「(金が)ない」と同じ用例である。なお、

④⑤ ありませんね。

という例があり、意味は他の例の「ない」と同じであるが、「ある」という動詞のていねいな否定形(「あり+ませ+ん」)である。

上例の「暇がない」「本はない」の「ない」は、「暇がある」「本がある」の「ある」が実体の存在を表すのに対して、非存在を表すと言える。「～に～がある／ない」という形で存在・非存在を表すのがその基本的な用法である。「私は弟がある」も「私には弟がある」の「に」が「は」の力で落ちた(吸収された)ものと考えていい。

入門期の学習者にとっては「ある」の活用が問題になる。「ならない」という形はなく、「ない」(形容詞)で代行されることが指導上の一番のポイントであり、次に「あれ」という命令形は文語としてしか使われないということである。一方「ない」は、他の形容詞と同じ変化をする。「なくはない」という形のあることから形容詞的性格を持っていることが理解されよう。せりふ③⑥の解説ですでに述べたので、ここでは省略するが、「ある」「ない」の〈ふつう体〉と〈ていねい体〉の語形の差に留意したい。一言つけ加えれ

ば、「～がないです」という〈ていねい形〉は現在ではよく使われるが、他の〈形容詞＋です〉より熟していない感じがあることである。ただし、この感じは個人差があるだろう。ただ、教科書などによっては「ないです」を多用しており、「ありません」を習得しにくくしている場合もあるので、一方に片よらないように注意したい。

「ある」「ない」については、次のような言い方を練習させたい。

- (1) 本・辞書・鉛筆・ノート・かばん・お金・さいふ……がある／ない
- (2) 電話・テレビ・ガス・水道・電気・風呂……がある／ない
- (3) 花・木・桜・桃・りんご……がある／ない
- (4) いす・席・部屋・教室・便所（トイレ）・家・玄関・庭・しばふ……
がある／ない
- (5) 弟・妹・きょうだい・父・母・両親・友だち……がある／ない
- (6) 目・鼻・口・耳・ひげ……がある／ない
- (7) 時間・暇・休み・余裕……がある／ない
- (8) 力・能力・実力……がある／ない
- (9) 問題・責任・必要・可能性……がある／ない
- (10) 不案・心配・恐れ……がある／ない
- (11) 高さ・広さ・重さ・長さ・幅……がある／ない

これらの名詞に修飾語をつけて〈拡張〉したり、「から」「ので」と組み合わせた文を作ってみることも有効であろう。

4. 練習問題

I 「から」に関するもの

I-1 例にならって、文を言いかえなさい。

(例) 山田さんが待っています。だから、急ぎましょう。→山田さんが待っていますから、急ぎましょう。

- 1) 電車に遅れます。だから、早く行きましょう。→
- 2) 天気がいいです。だから、散歩しませんか。→
- 3) もう9時です。だから、出かけましょう。→
- 4) すこし疲れしました。だから、休みましょう。→
- 5) ここで待っています。だから、早く行ってきてください。→
- 6) お金を払ってきます。だから、ここで待っていてください。→
- 7) 仕事は終わりました。だから、一緒に帰りましょう。→

I-2 次の文を完成させなさい。

- 1) 雨が降りましたから、_____。
- 2) おなかですきましたから、_____。
- 3) 朝おそく起きましたから、_____。
- 4) あした、試験がありますから、_____。
- 5) もう遅いから、_____。
- 6) もう12時ですから、_____。
- 7) 日本語の辞書を買いたいから、_____。
- 8) 私は日本語が話せませんから、_____。
- 9) 子どものころからだが弱かったから、_____。
- 10) 母が病気ですから、_____。

I-3 「理由」となる部分に、a～qのことばを自由に使って——ヒント

として一文を完成させなさい。

| | | | | | | | | | | | | | |
|---|-------|---|-------|---|------|---|-----|---|----|---|-----|---|-----|
| a | たべる | b | 起きる | c | おくれる | d | 乗る | e | 行く | f | 来る | | |
| g | 分かる | h | 知る | i | 見る | j | ある | k | ない | l | おそい | m | はやい |
| n | むずかしい | o | おもしろい | p | 上手だ | q | 下手だ | | | | | | |

- 1) _____から、おなかがすきました。
- 2) _____から、早く行きましょう。
- 3) _____から、ここで待っていてください。
- 4) _____から、一緒に勉強しませんか。
- 5) _____から、教えてください。
- 6) _____から、たいへん困りました。

II 「ので」に関するもの

II-1 例にならって、文を言いかえなさい。

(例) この本を友だちに返さなくてはなりません。それで、ここで待っています。→この本を友だちに返さなくてはならないので、ここで待っています。

<注意：「ので」の前は「ふつう体」にすること。>

- 1) 学校が始まりました。それで、ずいぶんにぎやかになりました。→
- 2) わたしが遅れました。それで、遅くなってしまいました。→
- 3) 掲示板を見る暇がありませんでした。それで、ちょっと見てきたいです。→
- 4) ほしい本はこの店にありません。それで、ほかへ行ってさがします。
→
- 5) ずいぶん歩きました。それで、足が痛くなりました。→

II-2 次の文を完成させなさい。

- 1) 日本語はむずかしいので、_____。
- 2) 先週は京都へ行ったので、_____。

- 3) あしたは試験があるので、_____。
- 4) 夏休みに富士山に登るので、_____。
- 5) 妹が日本へ来たので、_____。
- 6) お金が足りなかったので、_____。
- 7) 私の部屋にはテレビがないので、_____。
- 8) 私は野球が好きなので、_____。

Ⅲ 「から」「ので」の両方に関するもの

次のAグループのことばとBグループのことばを、「から」「ので」のどちらかを使って、正しい文になるように結びつけなさい。

| A グループ | B グループ |
|-------------|----------------|
| a いそがしい | a 行きます。 |
| b いそがしくない | b 行きません。 |
| c いそがしかった | c 行きました。 |
| d いそがしくなかった | d 行きませんでした。 |
| e いそがしいだろう | e 行きましょう。 |
| | f 行きなさい。 |
| | g 行くでしょう。 |
| | h 行かないでしょう。 |
| | i 行ったでしょう。 |
| | j 行かなかったでしょう。 |
| | k 行かないほうがいいです。 |
| | l 行かないつもりでした。 |
| | m 行ってもいいですか。 |

Ⅳ 質問と応答に関するもの

Ⅳ-1 例のように、() のことばを使って、「～からです」の文になおしなさい。

(例) A どうして休みましたか。

B (かぜをひく) → かぜをひいたからです。

1) A どうして行きませんか。

- B (とてもいそがしい) →
- 2) A どうして食べませんでしたか。
B (おなかが痛い) →
- 3) A どうして日本語をならいますか。
B (歴史を勉強したい) →
- 4) A どうして早く帰りましたか。
B (用事がある) →

Ⅳ-2 例のように____の部分に理由になる文を入れなさい。

(例) A ずいぶんにぎやかになりましたね。

B ええ。学校が始まったからです/でしょう。

- 1) A 田中くんはどうして来ないのでしょうね。
B たぶん、_____からでしょう。
- 2) A 山本さんはどうしてあんなに日本語がじょうずになったんでしょうね。
B きっと、_____からでしょう。
- 3) A 大木さんはどうしてやせたんでしょうね。
B そうですね。_____からでしょう。
- 4) A こんないい本がどうしてどこにもないんでしょうね。
B _____からです/でしょう。

Ⅳ-3 例のように()の文を「～んですか」の文に言いかえなさい。

(例) A 友だちが待っています。

B そうですか。(どこで待っていますか) → どこで待っている
んですか。

- 1) A 本を買いに行きます。
B そうですか。(どこへ行きますか) →
- 2) A ここで友だちに会います。

- B そうですか。(何時に会いますか)
- 3) A あした試験があります。
B そうですか。(何の試験がありますか) →
- 4) A 来週国へ帰ります。
B そうですか。(どうして帰りますか) →
- 5) A あした北海道へ行きます。
B そうですか。(何で行きますか) →

Ⅳ-4 次のBの会話を完成させない。

- 1) A もう、帰ります。
B でも、せっかく来たんだから、_____。
- 2) A もう、スキーはやめます。
B でも、せっかく上手になったんだから、_____。
- 3) A もう、おなかがいっぱいです。
B でも、せっかく作ったんですから、_____。
- 4) A このシャツはあまりよくありません。
B でも、せっかく買ったんだから、_____。

V 例のように、3つのことばを①「～て、～から、～」 ②「～て、～ので、～」 ③「～ので、～から、～」の形になおしなさい。3つともうまくできるとは限りません

(例) むずかしい・よく分からない・教えてくださいませんか。

→①むずかしくて、よく分かりませんから、おしえてくださいませんか。

→②むずかしくて、よく分からないので、おしえてくださいませんか。

→③むずかしいので、よく分かりませんから、教えてくださいませんか。

- 1) くらい・よく見えない・電気をつけてください。→①、→②、→③

- 2) 高い・買えない・今日はやめましょう。→①, →②, →③
 3) 遊びすぎる・疲れる・はやく寝ます。→①, →②, →③
 4) 事故だ・遅刻する・お知らせします。→①, →②, →③
 5) うっかりする・大事な本をなくす・おわびします。→①, →②, →③

VI 次のBの会話の〔 〕の中, a~kのことばを入れて, 「まるで〔 〕
 (の) ようです」という言い方にしなさい。

a 絵はがき b 夢 c 夢を見ている d 宝石 e 映画に出てくる
 f 冬 g 雪が降っている h 石 i 石をかむ j お祭り k 芋
 を洗う

- 1) A 景色がきれいですね。
 B ええ。まるで〔 〕ようです。
 2) A 色がきれいですね。
 B ええ。まるで〔 〕ようです。
 3) A ずいぶん混んでいますね。
 B ええ。まるで〔 〕ようです。
 4) A このごろはずいぶん寒いですね。
 B ええ。まるで〔 〕ようです。
 5) A このパンは固いですね。
 B ええ。まるで〔 〕ようです。
 6) A 試験に合格してうれしいでしょうね。
 B ええ。まるで〔 〕ようです。

VII あいさつの言い方 (おわびと感謝)

VII-1 例にならって, 言いなさい。

(例) ごめんなさい・遅れる → ごめんなさい, 遅れてしまって。

- 1) ごめんなさい・本を忘れる→
 2) ごめんなさい・りんごを食べる→

3) ごめんなさい・コップを割る→

4) ごめんなさい・本をよごす→

Ⅶ-2 次の a～q のことばを使い、例のように 1)～7) の形で、感謝の言い方をならないさい。

| | | | | | | | | | | | |
|---|-----|---|------|---|-----|---|-------|---|--------|---|------|
| a | きのう | b | きょう | c | 先日 | d | 先週 | e | ゆうべ | f | この前 |
| g | みかん | h | 手紙 | i | 電話 | j | プレゼント | k | よいニュース | | |
| l | 送る | m | 知らせる | n | 見せる | o | 教える | p | くださる | q | いただく |

(例)① きのうは、[ありがとう／ありがとうございます。] (「どうも」は使っても使わなくてもよい。)

(例)② 先日は、みかんを送ってくださって、[ありがとう／ありがとうございます。]

1) ___は、[]

2) ___を []

3) ___て []

4) ___は、___を []

5) ___は、___て []

6) ___を___て []

7) ___は、___を___て []

<注意：動詞の場合は（本動詞の「くださる／いただく」を除き、）～てくれて／くださって」の形になる。>

Ⅷ 次の a～v のことばを使い、①「XらしいX」 ②「XらしいY」という言い方を作りなさい。

| | | | | | | | | | | | | | | | |
|---|----|---|-----|---|----|---|-----|---|-----|---|--------|---|----|---|-----|
| a | 男 | b | 女 | c | 学者 | d | 子ども | e | 政治家 | f | スポーツマン | | | | |
| g | 社長 | h | あなた | i | 彼 | j | 春 | k | 夏 | l | 秋 | m | 冬 | n | 暖かさ |
| o | 暑さ | p | 涼しさ | q | 寒さ | r | 美しさ | s | 活発さ | t | 考え方 | u | 態度 | v | 親切さ |

- 1) あの人は [①または②] です。
- 2) 私は [①または②] が好きです。
- 3) このごろは [①または②] が感じられます。

5. 参考文献

- 浅見 徹 1964 「カラとノデ」『講座現代語⑥・口語文法の問題点』 明治書院
- 井上和子 1976 『変形文法と日本語(上)』 大修館
- 久野 暉 1973 『日本文法の研究』 大修館
- 国立国語研究所 1951 『現代語の助詞・助動詞』 秀英出版
- 鈴木 忍 1978 『日本語教育ハンドブック③文法Ⅰ』 国際交流基金
- 1976 「原因・理由を表す助詞の異同」『日本語学校論集Ⅲ』 東京外国語大学付属日本語学校
- 寺村秀夫 1981 『日本語の文法(下)』 国立国語研究所
- 永野 賢 1952 「『から』と『ので』はどう違うか」『国語と国文学』 vol. 29, No. 1 至文堂 (『伝達論にもとづく日本文法の研究』 1970 東京堂 に再録)
- 日本語教育学会 1982 『日本語教育事典』 大修館
- 松村明(編) 1969 『助詞・助動詞詳説』 学燈社
- 1971 『日本文法大辞典』 明治書院
- 三浦つとむ 1975 『日本語の文法』 勁草書房
- 三尾 砂 1958 『話しことばの文法』 法政大学出版局 (初版は1942)
- 三上 章 1953 『現代語法序説』 くろしお出版
- 南不二男 1974 『現代日本語の構造』 大修館
- 森田良行 1977 『基礎日本語』 角川書店
- 湯沢幸吉郎 1944 『日本語表現文典』 国際文化振興会
- Alfonso, Anthony 1966 “Japanese Language Patterns” vol. I 上智大学出版部
- Joseph, Lewis S. 1976 “The syntax and semantics of Japanese

complementation" *Syntax and Semantics: Volume 5, Japanese Generative Grammar*, ed. by M. Shibatani, Academic Press.

Martin, Samuel 1954 "Essential Japanese" Tuttle

————— 1975 "A Reference Grammar of Japanese"
Yale Univ. Press.

Nakada, Seiichi 1979 "Kara and Node Rvisited" *Journal of the Association of Teachers of Japanese*, vol. 12, No2 · 3, A. T. J.

Tawa, Wako 1974 "On Kara and Node" 『日本語教育』24号 日本語教育学会

資 料

資料1. 使用語彙一覧

これは、この映画中に言語表現として現れた全ての語について一覧表にしたものである。資料2.のシナリオ全文同様、教材として活用できることも考慮してかな（ひらがな、かたかな）書きにしてある。

1. 見出し語はアイウエオ順に配列し、そこにその使用文例を全て書き出した。
2. 見出し語の認定については、初級日本語教育の立場に立っている。
 - 2.—1. 接頭辞「お」や、接尾辞「さん」「えん(円)」「にん(人)」は、見出し語として取り上げている。
 - 2.—2. 数詞は、助数詞と切り離して見出し語に立っている。
 - 2.—3. 動詞は、終止形を見出し語にしている。
 - 2.—4. 「ない」「なくては」「ならない」は、見出し語にしている。
 - 2.—5. 形容動詞は、「___な」の形を見出し語にしている。
 - 2.—6. 「です」に前接する「ん」は、一語扱いにして見出し語にしている。
 - 2.—7. 「ごめんなさい」「おまちどおさま」等、慣用的表現として扱ったものは、そのまま見出し語にしている。
 - 2.—8. 接続助詞「て」や助動詞「た」は、ここでは動詞部分に含め見出し語にしていない。
3. 見出し語の語義、活用変化、他の語との結びつき等に基づいて下位分類する場合には、(1)(2)……のようにした。
 - 3.—1. 「ふん(分)」等、数詞によって助数詞の発音が異なる場合は下位分類した。
 - 3.—2. 動詞は、まず本動詞としての用法と補助動詞としての用法で大きく二分した。本動詞の場合は、「ます」形であるか、「—て」等の形であるかで下位分類し、補助動詞が違えばさらに下位分類してあ

る。また常体での言い方は、一語扱いにして別の分類にした。補助動詞の意味・用法の違いによる下位分類はしていない。

- 3.—3. 「です」は、それに伴う終助詞の種類、また「です」に「ん」が前接するかどうかにより下位分類してある。
- 3.—4. 助詞「か」「が」「から」「で」「に」「ね」「の」等は、その意味、用法によって下位分類してある。
4. 「ます」「ました」については文例の列挙を省略し、文番号だけを示した。ただし、確認や発見の「た」を含む「ました」は文例をあげた。「ません」「ましょう」は省略していない。「ません」は、その用法により下位分類してある。
5. 使用文例の文頭には、①②……の数字がつけてある。これはシナリオでの文通し番号であり、この解説書全体に共通のものである。同一見出し語内では、この順に文例を提出した。(1)(2)……と下位分類した場合にも、その分類内で同一の提出順をとっている。全くの同一文については通し番号を横に並べ、引用を一回ですませた。
6. 見出し語の横には〔 〕で常用漢字の範囲内で漢字を示し、またその横には（ ）で語の使用回数を示した。

ああ(4)

- ① ああ、ごめんなさい、おそくなってしまって。
- ② ああ、どうも。
- ③ ああ、つかれた。
- ④ ああ、ありました。

あう [会う] (1)

- ① このほんをかえさなくてはならないので、としょかんのまえであうんです。

あし [足] (1)

- ① あるきすぎて、あしがぼろのようです。

あっち(1)

- ① あっちへいってみましょうか。

あの(1)

- ① あのみせにはいってみましょうよ。

あら(4)

- ① あら、ほんとう？
- ② あら、そう。
- ③ あら、これは、わたしがいまみていたえとよくにているわ。
- ④ あら、ほんは、なかったんですか。

ありがとう(3)

- ① これ、どうもありがとう。
- ② ありがとうございました。
- ③ きょうは、いろいろありがとう。

ある(3)

- ① きょうは、なにかようじがありますか。
- ② ありませんね。
- ③ ああ、ありました。

あるく [歩く] (2)

(1)㉑ あるきすぎて、あしがぼうのようです。

(2)㉒ ずいぶんあるいたので、つかれました。

あんなに(1)

㉔ あんなにさくらがちって――。

いい(3)

㉕ ええ、いいですよ。

㉖ きょうは、おてんきがいいから、さんぽをしましょうよ。

㉗ それは、いいですね。

いいえ(1)

㉘ いいえ、このほんをとしょかんにかえすだけです。

いく [行く] (10)

(1)㉙ やまださんがまっているから、はやくいきましょうよ。

㉚ ジャあ、さんになでかんだへいきませんか。

(2)㉛ かんだへいってから、さくらをみにいきましょうよ。

㉜ さあ、ほんは、かったから、さくらをみにいきましょう。

(3)㉝ ちょっとけいじばんをみていきませんか。

(4)㉞ このみせにはないので、ほかへ行ってさがします。

(5)㉟ かんだへいってから、さくらをみにましよう。

(6)㊱ ジャあ、ぼくは、ここでまっていますから、はやくいってきてくださ
い。

(7)㊲ あっちへいってみましょうか。

(8)㊳ どうしてかんだへいくんですか。

いそぐ [急ぐ] (1)

㊴ やまださんがまっているから、いそぎましょう。

いち [一] (1)

㊵ いちじじゅうごふん。

いま [今] (1)

㊶ あら、これは、わたしがいまみていたえとよくにているわ。

いやあ(1)

㊦ いやあ、どうもすみません。

いる(11)

(1)㊧ そのけいじばんにでていましたね。

㊨ ジャあ、ぼくは、ここでまっていますから、はやくいってきてください。

㊩ よくにしていますね。

(2)㊪ ジャあ、わたし、このほんをとしゃんにかえしてきますから、ちょっとまっていてください。

㊫ おかねをはらってきますから、ちょっとまっていてください。

(2)㊬ あら、これは、わたしがいまみていたえとよくにしているわ。

(3)㊭ やまださんがまっているから、いそぎましょう。

㊮ やまださんがまっているから、はやくいきましようよ。

(4)㊯ まるでゆきがふっているようですね。

(5)㊰ やまださんがまっているんですか。

(6)㊱ あら、これは、わたしがいまみていたえとよくにしているわ。

いろいろ(1)

㊲ きょうは、いろいろありがとう。

え [絵] (1)

㊳ あら、これは、わたしがいまみていたえとよくにしているわ。

ええ(12)

㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ええ。

㊼ ええ、いいですよ。

㊽ ええ、わたしも。

えん [円] (1)

㊾ ろっぴゃくえんのおつりです。

お(3)

㊿ きょうは、おてんきがいいから、さんぽをしましょうよ。

⑥4 おかねをはらってきますから、ちょっとまっていてください。

⑥6 ろっぴゃくえんのおつりです。

おくれる〔遅れる〕(1)

②2 わたしがおくれたので、おそくなってしまいました。

おそい〔遅い〕(3)

① ああ、ごんなめさい、おそくなってしまっ。

②0 ごめんなさい、おそくなってしまっ……。

②2 わたしがおくれたので、おそくなってしまいました。

おまちどおさま〔お待ちどおさま〕(2)

④6⑥8 おまちどおさま。

か(11)

(1)⑤ やまださんがまっているんですか。

②8 きょうは、なにかようじがありますか。

③0 どうしてかんだへいくんですか。

④2 あら、ほんは、なかったんですか。

④7 そのみせは、どうかな。

(2)①7 ちょっとけいじばんをみていきませんか。

②8 じゃあ、さんにんでかんだへいきませんか。

⑤0 あっちへいってみましょうか。

⑤7 せっかくきたのだから、もうすこしさがしてみませんか。

⑦7 すわりませんか。

(3)⑤5 そうですか……。

が(12)

③ やまださんがまっているから、いそぎましょう。

⑤ やまださんがまっているんですか。

⑫ がっこうがはじまったので、ずいぶんぎやかになりましたね。

⑬ やまださんがまっているから、はやくいきましょうよ。

⑲ わたしがおくれたので、おそくなってしまいました。

⑳ きょうは、なにかようじがありますか。

㉑ きょうは、おてんきがいいから、さんぽをしましょうよ。

㉒ わたしも、さっきけいじばんをみるひまがなかったので、ちょっとみてきます。

㉓ あら、これは、わたしがいまみていたえとよくにているわ。

㉔ あんなにさくらがちって——。

㉕ まるでゆきがふっているようですね。

㉖ あるきすぎて、あしがぼうのようです。

かう [買う] (2)

(1)㉗ にほんのががしゅうをかいたいからです。

(2)㉘ さあ、ほんは、かったから、さくらをみにいきましょう。

かえず [返す] (3)

(1)㉙ このほんをかえさなくてはならないので、としょかんのまえであうんです。

(2)㉚ ジャあ、わたし、このほんをとしょかんにかえしてきますから、ちょっとまっていてください。

(3)㉛ いいえ、このほんをとしょかんにかえずだけです。

がしゅう [画集] (1)

㉜ にほんのががしゅうをかいたいからです。

がっこう [学校] (1)

㉝ がっこうがはじまったので、ずいぶんにごやかになりましたね。

かね [金] (1)

㉞ おかねをはらってきますから、ちょっとまっていてください。

から (12)

(1)㉟ わたしたちのじゅぎょうは、らいしゅうからですね。

(2)㊱ かんたへいってから、さくらをみにいきましょうよ。

(3)㊲ やまださんがまっているから、いそぎましょう。

㊳ やまださんがまっているから、はやくいきましょうよ。

- ③② きょうは、おてんきがいいから、さんぼをしましょうよ。
- ③⑤ ジャあ、わたし、このほんをとしょかんにかえしてきますから、ちょっとまっていてください。
- ③⑦ ジャあ、ぼくは、ここでまっていますから、はやくいつてきてください。
- ③⑦ せっかくきたのだから、もうすこしさがしてみませんか。
- ③④ おかねをはらってきますから、ちょっとまっていてください。
- ③⑥ さあ、ほんは、かったから、さくらをみにいきましょう。
- (4)③① にほんがのがしゅうをかいたいからです。
- ③④ ふるいほんだからです。

かんだ〔神田〕(3)

- ②⑧ ジャあ、さんになでかんだへいきませんか。
- ③⑩ どうしてかんだへいくんですか。
- ③③ かんだへいつてから、さくらをみにいきましょうよ。

きょう〔今日〕(3)

- ②⑥ きょうは、なにかようじがありますか。
- ③② きょうは、おてんきがいいから、さんぼをしましょうよ。
- ③③ きょうは、いろいろありがとう。

きれいな(1)

- ⑦① わあ、きれい。

ください(3)

- ③⑤ ジャあ、わたし、このほんをとしょかんにかえしてきますから、ちょっとまっていてください。
- ③⑦ ジャあ、ぼくは、ここでまっていますから、はやくいつてきてください。
- ③④ おかねをはらってきますから、ちょっとまっていてください。

くる〔来る〕(5)

- (1)③⑤ ジャあ、わたし、このほんをとしょかんにかえしてきますから、ちょ

っとまっていてください。

⑩ わたしも、さっきけいじばんをみるひまがなかったので、ちょっとみてきます。

⑪ おかねをはらってきますから、ちょっとまっていてください。

(2)⑫ ジャあ、ぼくは、ここでまっていますから、はやくいってきてください。

(3)⑬ せっかくきたのだから、もうすこしさがしてみませんか。

けいじばん [掲示板] (3)

⑭ そのけいじばんにでていましたね。

⑮ ちょっとけいじばんをみていきませんか。

⑯ わたしも、さっきけいじばんをみるひまがなかったので、ちょっとみてきます。

ここ(1)

⑰ ジャあ、ぼくは、ここでまっていますから、はやくいってきてください。

ございました(1)

⑱ ありがとうございます。

この(4)

⑲ このほんをかえさなくてはならないので、としょかんのまえであうんです。

⑳ いいえ、このほんをとしょかんにかえすだけです。

㉑ ジャあ、わたし、このほんをとしょかんにかえしてきますから、ちょっとまっていてください。

㉒ このみせにはないので、ほかへいってさがします。

ごめんなさい(3)

① ああ、ごめんなさい、おそくなってしまって。

② ごめんなさい。

③ ごめんなさい、おそくなってしまって……。

これ(3)

- ②④ これ、どうもありがとう。
③⑨ あら、これは、わたしがいまみていたえとよくにているわ。
⑥③ これです。

さあ(1)

- ⑥⑨ さあ、ほんは、かったから、さくらをみにいきましょう。

さがす [探す] (3)

- (1)④④ このみせにはないので、ほかへ行ってさがします。
(2)⑤⑦ セっかくきたのだから、もうすこしさがしてみませんか。
(3)⑥⑥ つかれたので、もうほんをさがすのは、やめます。

さくら [桜] (3)

- ③③ かんだへ行ってから、さくらをみにいきましょうよ。
⑥⑨ さあ、ほんは、かったから、さくらをみにいきましょう。
⑦④ あんなにさくらがちって——。

さっき(1)

- ③⑥ わたしも、さっきけいじばんをみるひまがなかったので、ちょっとみ
てきます。

さん(3)

- ③ やまださんがまっているから、いそぎましょう。
⑤ やまださんがまっているんですか。
⑩ やまださんがまっているから、はやくいきましょうよ。

さん [三] (1)

- ②⑧ じゃあ、さんにんでかんたへいきませんか。

さんぽ [散歩] (1)

- ③② きょうは、おてんきがいいから、さんぽをしましょうよ。

じ [時] (2)

- ⑨ なんじに？
⑩ いちじじゅうごふん。

しまう(3)

(1)⑳ わたしがおくれたので、おそくなってしまいました。

(2)① ああ、ごめんなさい、おそくなってしまって。

② ごめんなさい、おそくなってしまって……。

じゃあ(3)

⑳ じゃあ、さんいんでかんだへいきませんか。

㉑ じゃあ、わたし、このほんをとしょかんにかえしてきますから、ちょっとまっていてください。

㉒ じゃあ、ぼくは、ここでまっていますから、はやくいってきてください。

じゅうご [十五] (1)

⑩ いちじじゅうごふん。

じゅぎょう [授業] (1)

⑭ わたしたちのじゅぎょうは、らいしゅうからですね。

ずいぶん [随分] (2)

⑫ がっこうがはじまったので、ずいぶんにぎやかになりましたね。

⑲ ずいぶんあるいたので、つかれました。

すぎ [過ぎ] (1)

② もうにじゅうぶんすぎよ。

すぎる [過ぎる] (1)

⑧ あるきすぎて、あしがぼうのようです。

すこし [少し] (1)

⑦ せっかくきたのだから、もうすこしさがしてみませんか。

すっかり(1)

⑦ すっかりはるらしくなりましたね。

すみません(2)

㉑ すみません。

㉒ いやあ、どうもすみません。

する(1)

㉔ きょうは、おてんきがいいから、さんぽをしましょうよ。

すわる〔座る〕(1)

㉗ すわりませんか。

せっかく(1)

㉙ せっかくきたのだから、もうすこしさがしてみませんか。

そう(5)

㉘ あら、そう。

㉚ そうですね。

㉜ そう？

㉞ そうですか……。

㉠ そうですよ。

そこ(1)

㉡ そのけいじばんにでていましたね。

その(1)

㉣ そのみせは、どうかな。

それ(1)

㉤ それは、いいですね。

だ(2)

㉥ ふるいほんだからです。

㉧ せっかくきたのだから、もうすこしさがしてみませんか。

たい(1)

㉨ にほんがのがしゅうをかいたいからです。

だけ(1)

㉩ いいえ、このほんをとしょかんにかえすだけです。

たち(1)

㉪ わたしたちのじゅぎょうは、らいしゅうからです。

ちょっと(4)

①⑦ ちょっとけいじばんをみていきませんか。

③⑤ じゃあ、わたし、このほんをとしょかんにかえしてきますから、ちょっとまっていてください。

③⑥ わたしも、さっきけいじばんをみるひまがなかったので、ちょっとみてきます。

③④ おかねをはらってきますから、ちょっとまっていてください。

ちる〔散る〕(1)

⑦④ あんなにさくらがちって――。

つかれる〔疲れる〕(3)

(1)⑦⑨ ずいぶんあるいたので、つかれました。

(2)③② ああ、つかれた……。

③⑥ つかれたので、もうほんをさがすのは、やめます。

つり(1)

③⑥ ろっびゃくえんのおつりです。

で(3)

(1)⑦ このほんをかえさなくてはならないので、としょかんのまえであうんです。

③⑦ じゃあ、ぼくは、ここでまっていますから、はやくいってきてください。

(2)②⑧ じゃあ、さんにんでかんだへいきませんか。

でしょう(1)

③③ どうして、ないのでしょうかね。

です(1⑧)

(1)③③ これです。

③⑥ ろっびゃくえんのおつりです。

(2)⑤⑤ そうですか……。

(3)①⑨ そうですね。

③④ それはいいですね。

- ④⑨ ないですね。
- (4)②⑨ ええ、いいですよ。
- ⑤⑨ そうですよ。
- (5)①④ わたしたちのじゅぎょうは、らいしゅうからですね。
- (6)②⑧ にほんがのがしゅうをかいたいからです。
- ⑤④ ふるいほんだからです。
- (7)②⑦ いいえ、このほんをとしょかんにかえすだけです。
- (8)⑦⑤ まるでゆきがふっているようですね。
- ⑧① あるきすぎて、あしがぼろのようです。
- (9)⑤ やまださんがまっているんですか。
- ⑦ このほんをかえさなくてはならないので、としょかんのまえであらう
んです。
- ③⑩ どうしてかんだへいくんですか。
- ④② あら、ほんは、なかったんですか。
- でる [出る] (1)
- ①⑧ そのけいじばんにでていましたね。
- てんき [天気] (1)
- ②② きょうは、おてんきがいいから、さんぽをしましょうよ。
- と(1)
- ③⑨ あら、これは、わたしがいまみていたえとよくにているわ。
- どう(1)
- ④⑦ そのみせは、どうかな。
- どうして(2)
- ③⑩ どうしてかんだへいくんですか。
- ⑤③ どうして、ないのでしょね。
- どうも(3)
- ②④ これ、どうもありがとう。
- ②⑤ ああ、どうも。

㉔ いやあ、どうもすみません。

としょかん [図書館] (3)

⑦ このほんをかえさなくてはならないので、としょかんのまえであうんです。

㉔ いいえ、このほんをとしょかんへかえすだけです。

㉕ ジャあ、わたし、このほんをとしょかんにかえしてきますから、ちょっとまっていてください。

な(1)

㉔ そのみせは、どうかな。

ない(5)

(1)㉔ このみせにはないので、ほかへ行ってさがします。

㉔ ないですね。

㉕ どうして、ないのでしょね。

(2)㉔ わたしも、さっきけいじばんをみるひまがなかったので、ちょっとみてきます。

㉔ あら、ほんは、なかったんですか。

なくては(1)

⑦ このほんをかえさなくてはならないので、としょかんのまえであうんです。

なにか [何か] (1)

㉔ きょうは、なにかようじがありますか。

ならない(1)

⑦ このほんをかえさなくてはならないので、としょかんのまえであうんです。

なる(5)

(1)㉔ がっこうがはじまったので、ずいぶんにぎやかになりましたね。

㉔ すっかりはるらしくなりましたね。

(2)① ああ、ごめんなさい、おそくなってしまっ。

⑳ ごめんなさい、おそくなってしまって……。

㉒ わたしがおくれたので、おそくなってしまいました。

なに [何] (1)

㉑ なんじに？

に(8)

(1)㉑ なんじに？

(2)㉒ そのけいじばんにでていましたね。

㉓ いいえ、このほんをとしょかんにかえすだけです。

㉔ ジャあ、わたし、このほんをとしょかんにかえしてきますから、ちょっとまっていてください。

㉕ このみせにはないので、ほかへ行ってさがします。

㉖ あのみせにはいってみましょうよ。

(3)㉗ かんたへいってから、さくらをみにいきましょうよ。

㉘ さあ、ほんは、かったから、さくらをみにいきましょう。

にぎやかな(1)

㉙ がっこうがはじまったので、ずいぶんにぎやかになりましたね。

にじゅう [二十] (1)

㉚ もうにじゅうぶんすぎよ。

にほんが [日本画] (1)

㉛ にほんがのがしゅうをかいたいからです。

にる [似る] (2)

㉜ あら、これは、わたしがいまみていたえとよくにているわ。

㉝ よくにっていますね。

にん [人] (1)

㉞ ジャあ、さんにんでかんたへいきませんか。

ね(12)

(1)㉟ がっこうがはじまったので、ずいぶんにぎやかになりましたね。

㊱ わたしたちのじゅぎょうは、らいしゅうからです。

⑩ そのけいじばんにでていましたね。

⑪ そうですね。

⑫ それは、いいですね。

⑬ よくにしていますね。

⑭ ありませんね。

⑮ ないですね。

⑯ どうして、ないのでしょね。

⑰ すっかりはるらしくなりましたね。

⑱ まるでゆきがふっているようですね。

(2)① ね。

ねえ(1)

② ねえ？

の(9)

(1)⑦ このほんをかえさなくてはならないので、としゃかんのまえであうんです。

⑧ わたしたちのじゅぎょうは、らいしゅうからですね。

⑨ そのけいじばんにでていましたね。

⑩ にほんがのがしゅうをかいたいからです。

⑪ ろっびゃくえんのおつりです。

⑫ あるきすぎて、あしがぼうのようです。

(2)⑬ つかれたので、もうほんをさがすのは、やめます。

(3)⑭ どうして、ないのでしょね。

⑮ せっかききたのだから、もうすこしさがしてみませんか。

ので(7)

⑦ このほんをかえさなくてはならないので、としゃかんのまえであうんです。

⑩ がっこうがはじまったので、ずいぶんにぎやかになりましたね。

⑫ わたしがおくれたので、おそくなってしまいました。

③⑥ わたしも、さっきけいじばんをみるひまがなかったので、ちょっとみてきます。

④④ このみせにはないので、ほかへ行ってさがします。

⑤⑥ つかれたので、もうほんをさがすのは、やめます。

⑦⑨ ずいぶんあるいたので、つかれました。

はい(12)

(1)①④ わたしたちのじゅぎょうは、らいしゅうからですね。

②⑥ きょうは、なにかようじがありますか。

③② きょうは、おてんきがいいから、さんぽをしましょう。

④④ それは、いいですね。

⑤⑦ じゃあ、ぼくは、ここでまっていますから、はやくいってきてください。

⑥⑨ あら、これは、わたしがいまみていたえとよくにているわ。

⑦② あら、ほんは、なかったんですか。

⑧④ そのみせは、どうかな。

⑨⑥ つかれたので、もうほんをさがすのは、やめます。

⑩⑥ さあ、ほんは、かったから、さくらをみにいきましょう。

⑪③ きょうは、いろいろありがとう。

(2)④④ このみせにはないので、ほかへ行ってさがします。

はい(1)

⑥⑤ はい。

はいる [入る] (1)

⑥⑥ あのみせにはいってみましょうよ。

はじまる [始まる] (1)

⑥② がっこうがはじまったので、ずいぶんにぎやかになりましたね。

はやい [早い] (2)

⑥⑧ やまださんがまっているから、はやくいきましょうよ。

⑥⑦ じゃあ、ぼくは、ここでまっていますから、はやくいってきてください。

い。

はらう [払う] (1)

⑥4 おかねをはらってきますから、ちょっとまっています。

はる [春] (1)

⑦2 すっかりはるらしくなりましたね。

ひま [暇] (1)

③6 わたしも、さっきけいじばんをみるひまがなかったので、ちょっとみ
てきます。

ふる [降る] (1)

⑦5 まるでゆきがふっているようですね。

ふるい [古い] (1)

⑤4 ふるいほんだからです。

ふん [分] (2)

(1)② もうにじっぶんすぎよ。

(2)⑩ いちじじゅうごふん。

へ(5)

②8 ジャあ、さんにんでかんだへいきませんか。

③0 どうしてかんだへいくんですか。

③3 かんだへいってから、さくらをみにいきましょうよ。

④4 このみせにはないので、ほかへいってさがします。

⑤0 あっちへいってみましようか。

ほう [棒] (1)

⑧1 あるきすぎて、あしがほうのようです。

ほか [他] (1)

④4 このみせにはないので、ほかへいってさがします。

ぼく(1)

③7 ジャあ、ぼくは、ここでまっていますから、はやくいってきてくださ
い。

ほん [本] (7)

- ⑦ このほんをかえさなくてはならないので、としょかんのまえであうんです。
- ②⑦ いいえ、このほんをとしょかんにかえすだけです。
- ③⑤ ジャあ、わたし、このほんをとしょかんにかえしてきますから、ちょっとまっていてください。
- ④② あら、ほんは、なかったんですか。
- ⑤④ ふるいほんだからです。
- ⑤⑥ つかれたので、もうほんをさがすのは、やめます。
- ⑥⑨ さあ、ほんは、かったから、さくらをみにいきましょう。

ほんとう [本当] (1)

- ④ あら、ほんとう？

ほんとうに [本当に] (1)

- ⑦⑥ほんとうに……。

まえ [前] (1)

- ⑦ このほんをかえさなくてはならないので、としょかんのまえであうんです。

ました(6)

- (1)①②, ①⑥, ②②, ⑦②, ⑦⑨

- (2)⑥② ああ、ありました。

ましょう(7)

- ③ やまださんがまっているから、いそぎましょう。
- ①⑧ やまださんがまっているから、はやくいきましょうよ。
- ②② きょうは、おてんきがいいから、さんぽをしましょうよ。
- ③③ かんだへ行ってから、さくらをみにいきましょうよ。
- ⑤⑩ あっちへ行ってみましょうか。
- ⑥⑩ あのみせにはいってみましょうよ。
- ⑥⑨ さあ、ほんは、かったから、さくらをみにいきましょう。

ます(8)

⑳, ㉓, ㉔, ㉕, ㉖, ㉗, ㉘, ㉙, ㉚

ません(5)

(1)㉛ ありませんね。

(2)㉜ ちょっとけいじばんをみていきませんか。

㉝ じゃあ、さんにんでかんだへいきませんか。

㉞ せっかくきたのだから、もうすこしさがしてみませんか。

㉟ すわりませんか。

まつ [待つ] (6)

㊱ やまださんがまっているから、いそぎましょう。

㊲ やまださんがまっているんですか。

㊳ やまださんがまっているから、はやくいきましようよ。

㊴ じゃあ、わたし、このほんをとしょかんにかえしてきますから、ちょっとまっていてください。

㊵ じゃあ、ぼくは、ここでまっていますから、はやくいってきてください。

㊶ おかねをはらってきますから、ちょっとまっていてください。

まるで(1)

㊷ まるでゆきがふっているようですね。

みる [見る] (9)

(1)㊸ かんたへいってから、さくらをみにいきましようよ。

㊹ さあ、ほんは、かったから、さくらをみにいきましよう。

(2)㊺ ちょっとけいじばんをみていきませんか。

(3)㊻ わたしも、さっきけいじばんをみるひまがなかったので、ちょっとみてきます。

(4)㊼ あら、これは、わたしがいまみていたえとよくにているわ。

(5)㊽ わたしも、さっきけいじばんをみるひまがなかったので、ちょっとみてきます。

(6)⑤⑩ あっちへいってみましょうか。

④⑦ せっかくきたのだから、もうすこしさがしてみませんか。

⑥⑨ あのみせにはいってみましょうよ。

みせ [店] (3)

④④ このみせにはないので、ほかへ行ってさがします。

④⑦ そのみせは、どうかな。

⑥⑨ あのみせにはいってみましょうよ。

も(2)

③⑥ わたしも、さっきけいじばんをみるひまがなかったので、ちょっとみてきます。

⑧⑩ ええ、わたしも。

もう(3)

② もうにじっぶんすぎよ。

⑤⑧ つかれたので、もうほんをさがすのは、やめます。

④⑦ せっかくきたのだから、もうすこしさがしてみませんか。

やあ(1)

②① やあ。

やまだ [山田] (3)

③ やまださんがまっているから、いそぎましょう。

⑤ やまださんがまっているんですか。

⑩⑧ やまださんがまっているから、はやくいきましょうよ。

やめる(1)

⑤⑧ つかれたので、もうほんをさがすのは、やめます。

ゆき [雪] (1)

⑦⑤ まるでゆきがふっているようですね。

よ(7)

② もうにじっぶんすぎよ。

⑩⑧ やまださんがまっているから、はやくいきましょうよ。

- ㉔ ええ、いいですよ。
- ㉕ きょうは、おてんきがいいから、さんぽをしましょうよ。
- ㉖ かんたへいってから、さくらをみにいきましょうよ。
- ㉗ そうですよ。
- ㉘ あのみせにはいってみましょうよ。

ようだ(2)

- ㉙ まるでゆきがふっているようですね。
- ㉚ あるきすぎて、あしがぼろのようです。

ようじ [用事] (1)

- ㉛ きょうは、なにかようじがありますか。

よく(2)

- ㉜ あら、これは、わたしがいまみていたえとよくにているわ。
- ㉝ よくにしていますね。

らいしゅう [来週] (1)

- ㉞ わたしたちのじゅぎょうは、らいしゅうからですね。

らしい(1)

- ㉟ すっかりはらしくなりましたね。

ろっぴやく [六百] (1)

- ㊱ ろっぴやくえんのおつりです。

わ(1)

- ㊲ あら、これは、わたしがいまみていたえとよくにているわ。

わあ(1)

- ㊳ わあ、きれい。

わたし(6)

- ㊴ わたしたちのじゅぎょうは、らいしゅうからですね。
- ㊵ わたしがおくれたので、おそくなってしまいました。
- ㊶ じゃあ、わたし、このほんをとしょかんにかえしてきますから、ちょっとまっていてください。

③⑥ わたしも、さっきけいじばんをみるひまがなかったので、ちょっとみてきます。

③⑨ あら、これは、わたしがいまみていたえとよくにているわ。

③⑩ ええ、わたしも。

を(11)

⑦ このほんをかえさなくてはならないので、としょかんのまえであうんです。

①⑦ ちょっとけいじばんをみていきませんか。

②⑦ いいえ、このほんをとしょかんにかえすだけです。

③① にほんがのがしゅうをかいたいからです。

③② きょうは、おてんきがいいから、さんぼをしましょうよ。

③③ かんだへいってから、さくらをみにいきましようよ。

③⑤ じゃあ、わたし、このほんをとしょかんにかえしてきますから、ちょっとまっていてください。

③⑥ わたしも、さっきけいじばんをみるひまがなかったので、ちょっとみてきます。

⑤⑥ つかれたので、もうほんをさがすのは、やめます。

⑥④ おかねをはらってきますから、ちょっとまっていてください。

⑥⑤ さあ、ほんは、かったから、さくらをみにいきましよう。

ん(4)

(1)⑤ やまださんがまっているんですか。

⑦ このほんをかえさなくてはならないので、としょかんのまえであうんです。

③⑩ どうしてかんだへいくんですか。

(2)④② あら、ほんは、なかったんですか。

資料2. シナリオ全文

題 名 日本語教育映画
「てんきが いいから さんぽをしましょう」

——原因・理由の表現——

企 画 国立国語研究所
制 作 日本シネセル株式会社
フィルム 16m/m E K カラー・スタンダード
巻 数 全1巻
上映時間 5分
現 像 所 東映化学
録 音 詩売スタジオ
完 成 昭和55年6月30日

制作スタッフ

| | | | |
|------|------------------|---------|---------|
| 制 作 | 静 永 純 一 | 制作担当 | 佐 藤 吉 彦 |
| 脚 本 | 前 田 直 明 | 演 出 | 前 田 直 明 |
| 演出助手 | 田 畑 健 蔵 | 撮 影 | 相 良 国 康 |
| 撮影助手 | 渡 辺 晶 | 照 明 | 伴 野 功 |
| 照明助手 | 中 安 和 則 | 音 楽 | 鈴 木 武 |
| 録 音 | 谷 口 幸 充 (読売スタジオ) | | |
| ネガ編集 | 斎 藤 康 一 | | |
| 配 役 | 順 子 | 草 野 英 子 | |
| | 正 子 | 土 井 美 加 | |
| | 山 田 | 星 野 宣 | |

| カット | 画 面 | セ リ フ |
|-----|--|---|
| 1 | メイン・タイトル 「日本語教育映画」 | |
| 2 | テーマ・タイトル 「てんきがいいから さんぽ をしましょう」 ——原因・理由の表現—— | |
| 3 | <お茶の水駅前> 国電お茶の水駅 改札口 | |
| 4 | 待つ順子 | |
| 5 | 雑踏 学生が大勢、改札口から出て くる | |
| 6 | 待つ順子 順子、腕時計と改札口を見較 べる | |
| 7 | 雑踏 改札口から出て来る学生たち | |
| 8 | 待つ順子 正子、足早に来て、順子のそ ばへ来る 二人、足早に歩き始める | 正子「①ああ、ごめんなさ い、おそくなってしま って。」 順子「②もうにじっぶんすぎ よ。 ③やまださんがまっ ているから、いそぎまし ょう。」 |
| 9 | 二人歩き (移動) | 正子「④あら、ほんとう？ ⑤やまださんがまっ ているんですか。」 順子「⑥ええ。 ⑦このほんをかえさな |

| | | |
|----|--|---|
| | | くてはならないので、 としょかんのまえであ うんです。」 |
| | | 正子「⑧あら、そう。 ⑨なんじに？」 |
| | | 順子「⑩いちじじゅうごふ ん。」 |
| 10 | 二人歩き 正子笑いながら ニコライ堂が見える。聖橋を 渡る二人。掘ばたの木々は、 うっすら緑になっている | 正子「⑪ごめんなさい。」 |
| 11 | <大学構内> 二人 (後退移動) | 正子「⑫がっこうがはじまっ たので、ずいぶんにぎ やかになりましたね。」 順子「⑬ええ。 ⑭わたしたちのじゅぎ ょうは、らいしゅうか らですね。」 正子「⑮ええ。 ⑯そこのけいじばんに でていましたね。」 |
| 12 | 掲示板が見え、学生がいる | |
| 13 | 二人 歩き 掲示板の横を通りかかる二人 | 正子「⑰ちょっとけいじばん をみていきませんか。」 順子「⑱やまださんがまっ ているから、はやくいき ましようよ。」 正子「⑲そうですね。」 |
| 14 | 正子、笑いながら 図書館の前 山田、待っている。二人、あ | 順子「⑳ごめんなさい、おそ |

| | | |
|----|--------|--|
| | らわれる | くなってしまうて… …。」 |
| 15 | 順子, 正子 | 山田「 ²¹ やあ。」 正子「 ²² わたしがおくれたので、おそくなってしまいました。」 ²³ すみません。」 |
| 16 | 三人 | 順子「 ²⁴ これ(本), どうもありがとう。」 山田「 ²⁵ ああ, どうも。 ²⁶ きょうは, なにかよろじがありますか。」 正子「 ²⁷ いいえ, このほんをとしょかんにかえすだけです。」 山田「 ²⁸ じゃあ, さんにかんだへいきませんか。」 |
| 17 | 正子 | 正子「 ²⁹ ええ, いいですよ。 — ³⁰ どうしてかんだへいくんですか。」 |
| 18 | 山田 | 山田「 ³¹ にほんがのがしゅうをかいたいからです。」 |
| 19 | 順子・正子 | 順子「 ³² きょうは, おてんきがいいから, さんぽをしましょうよ。」 正子「 ³³ かんだへいってから, さくらをみにいきましょうよ。」 |
| 20 | 山田 | 山田「 ³⁴ それは, いいですね。」 |
| 21 | 正子 | 正子「 ³⁵ じゃあ, わたし, このほんをとしょかんにか |

| | | |
|----|--|--|
| | | かえしてきますから、 ちょっとまっていてく ださい。」 |
| 22 | 順子 | 順子「⑳わたしも、さっきけ いじばんをみるひまが なかったので、ちょっ とみてきます。」 |
| 23 | 三人 | 山田「㉑じゃあ、ぼくは、こ こでまっていますから、 はやくいってきて ください。」 二人「㉒ええ。」 |
| 24 | 順子、正子、歩き去る 〈神田・古本屋街〉 三人、本屋・一誠堂に入る | |
| 25 | 山田 山田、本棚を見ている | |
| 26 | 順子、正子 順子、正子、それぞれ画集を 見ている。順子、画集を書棚 に戻して正子のところに来 る。画集をのぞいて―― | 順子「㉓あら、これは、わた しがいまみていたえと よくにているわ。」 正子「㉔そう？」 |
| 27 | 順子、見ていた画集を取って きて、正子に開いて見せる 二冊の日本画集 | 正子「㉕よくにしていますね。」 |
| 28 | 二人の (山田入る) | 順子「㉖あら、ほんは、なか ったんですか。」 山田「㉗ええ。 ㉘このみせにはないの で、ほかへ行ってさが |

| | | |
|----|---|---|
| | | します。」 |
| | | 順子「④⑤ええ。」 |
| | | 順子「④⑥おまちどおさま。」 |
| 29 | 順子、書棚に本を戻してくる 三人、出てくる。隣の書店 へ入って行く 一誠堂書店の表、移動して松 村書店の表 | 山田「④⑦そのみせは、どうか な。」 |
| 30 | 三人、出て来て 松村書店の表 | 順子「④⑧ありませんね。」 正子「④⑨ないですね。」 山田「④⑩あっちへいってみま しょうか。」 順子「④⑪ええ。」 |
| 31 | 書店・巖松堂の表口 三人、入って行く | |
| 32 | 奥野書店の表 三人、入って行く | |
| 33 | 奥野書店の表 店から出て来る三人 | 山田「④⑫ああ、つかれた… …。」 順子「④⑬どうして、ないので しょうね。」 山田「④⑭ふるいほんだからで す。」 順子「④⑮そうですか……。」 |
| 34 | 山田 | 山田「④⑯つかれたので、もう ほんをさがすのは、や めます。」 |
| 35 | 三人 | 正子「④⑰せっかくきたのだから、もうすこしさがし てみませんか。 ④⑱ねえ？」 順子「④⑲そうですよ。 ④⑳あのみせにはいって みましょうよ。」 |
| | 順子、左の方を指す | |

| | | |
|----|---|--|
| 36 | 書店・大屋書房の中 | ⑥①ね。」 |
| 37 | 三人、入る。書棚を見まわす 山田 山田、書棚を見まわして 画集を手に取って開いてみる | 山田「⑥②ああ、ありました。 ⑥③これです。 ⑥④おかねをはらってき ますから、ちょっとま っていてください。」 |
| 38 | 順子・正子 | 二人「⑥⑤はい。」 |
| 39 | 浮世絵冊子の (ページをくる) | 店員の声「⑥⑥ろっぴゃくえん のおつりです。 ⑥⑦ありがとうございます した。」 |
| 40 | 順子・正子 B・S (山田来る) | 山田「⑥⑧おまちどおさま。 ⑥⑨さあ、ほんは、かっ たから、さくらをみに いきましよう。」 |
| 41 | <千鳥が淵公園> 桜 | 二人「⑦⑩ええ。」 |
| 42 | 堀と桜 | |
| 43 | 桜の下を歩く三人 (移動) | 順子「⑦⑪わあ、きれい。」 山田「⑦⑫すっかりはるらしく なりましたね。」 |
| 44 | 順子・正子 | 正子「⑦⑬ええ。」 正子「⑦⑭あんなにさくらがち って——。」 順子「⑦⑮まるでゆきがふって いるようですね。」 |
| 45 | 散る桜 | 正子「⑦⑯ほんとうに……。」 |
| 46 | 桜とボート | |

| | | |
|----|-------------------------------------|--|
| 47 | 三人 (ベンチへ来る) 三人、ベンチに座りながら | 山田「⑦すわりませんか。」 二人「⑧ええ。」 順子「⑨ずいぶんあるいたの で、つかれました。」 |
| 48 | 順子・正子 正子、足をさする | 正子「⑩ええ、わたしも。」 正子「⑪あるきすぎて、あし がぼうのようです。」 |
| 49 | 山田 | 山田「⑫いやあ、どうもすみ ません。 ⑬きょうは、いろいろ ありがとう。」 |
| 50 | <ベンチの三人> 三人 | |
| 51 | タイトル 企画 国立国語研究所 制作 日本シネセル株式会社 | |

日本語教育映画解説19

てんきがいいから さんぽをしましょう

—原因・理由の表現—

昭和58年3月

国立国語研究所

〒115 東京都北区西が丘3-9-14
電話 東京(900)3111(代表)